
GOLDEN CARAVAN

神田多太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOLDEN CARAVAN

【Nコード】

N0894Z

【作者名】

神田多太郎

【あらすじ】

あくまでも素人が暇つぶしに書いたくそファンタジーです。誤字脱字、誤変換、あるいは他の作品からのパクリらしきものがあるかもしれませんが、それでもご勘弁くださいな。

ただ、どなたかイラストが得意な方がいたとしたら、登場人物などのイラストを描いていただけると嬉しいです。

第1話　すべてのはじまり

レミヤザ地方は初春の頃であつた。その王都であるフェニツカの東部、スーミンにあるレミヤザ国立魔封術学校もそんな春の気配の中にあつた。魔封術専門学校とは封魔師と呼ばれる天職者を育成するための学校であり、そこはちょうど卒業を控えた面々に対する試験の日を迎えており、ジヨルフ・アバーナシーもその一人であつた。

ジヨルフは使い慣れた銅剣を腰に下げてこれまた着馴れた青色の布のマントを羽織つて支度を整えた。それが封魔師にとっての基本的な形式であり、学生である彼らにとつての最高の武装であつた。

ジヨルフは最後に襟元の校章を確認して寮の部屋を出た。

そこは専門学校の裏手にある森の入口であつた。ジヨルフたち試験に臨む5年生たちはまだ冷たい朝の空気の中でそこに集合していた。ジヨルフを含めた数人は一様に朗らかであり、すっかり開き直つたようにして談笑していた。

「ていうかよ、ここまで来たらさっさと始まつてさっさと終わつてくれって感じやろ……」ジヨルフは顎を掻きながらそう言った。

「そうやつつよ、この待つてる時間がたまらんわあ……」ジヨルフのとなりに座つていた男が立ち上がつて背伸びをした。その背の高い男、グロツケン・ギブソンは後ろで束ねた銀髪を揺らすようにして首の骨をコキコキと鳴らしてみせた。彼らがそうやって談笑してるところに小太りの男がずんずんと歩み寄つてきた。

「おいおいおい、緊張感がないとケガすっぞ。ボラスみたいに復習とかしたらどんげや？」小太りの男、シエロ・コスは鋭い目をして彼らの顔を睨んだ。

「はあ？ シエロこそ緊張しちよつちやねえとや？」グロツケンはニヤニヤしながらそう言つてシエロの背後に立つた。そして彼がシエロの脇腹をくすぐろうとするとシエロはそれを嫌つて身を交わした。

「よし、もう大丈夫やわ。復習完了つと！」そう言つて分厚い教科書を閉じたのはボラス・リンドバーグであつた。ボラスはその教科書を布鞆に大事そうに納めると膝を叩いて勢いよく立ち上がった。ボラスは大柄な男であり、丸い鼻をぼりぼりと掻きながらジョルフたちに歩み寄つた。

「ボラス、だいたいもう余裕じゃねえとけ？」ジョルフはそう言つてボラスの太い腕を掴んだ。するとボラスは朗らかに笑つて余裕なんてないと返した。

午前8時半、森の入口に卒業予定の5年生11人がそろつた。するとそれに合わせたように数人の教師たちがやつてきた。そのうちの一人、彼らの担任であるラシュワン・タズーが手を叩くと一同は姿勢と衣服とを正してそこに整列した。

「準備は大丈夫か？ 体調に問題はないか？」タズーは教え子たちの顔を見渡すようにしてそう言つた。整列した一同はそれぞれに頷いてみせた。

「まずはシエロ、あまり先走りするんじゃないぞ。あくまでもここにいる全員が試験に当たつては同じ立場だということを忘れるなよ。」タズーがそういうとシエロは惘然とした顔のまま頭を掻いた。

「次にグロツケン、少しは緊張感を持つて臨むようにしろよ。オマエは樂觀主義が行きすぎるから危ないんだ。」タズーがそういうとグロツケンは問題ないと言つて胸を叩いてみせた。そして彼がへらへらと笑うとタズーは苦笑いしてさらに注意した。

「そしてジョルフ、おまえの場合は……」タズーはそうやつて11人の教え子たちに対して一人一人に声をかけてやつた。教え子たちは恩師からの言葉に頷きながら試験に向けての気持ちを高めていた。

「さあ、あとはこれまでに学んだことのすべてを自身持つてやるだけだ。自分の力を信じてやつて来い！」タズーはそう言つて何度か手を叩いた。すると一同はそろつて返事をしていよいよ準備に入つたのだ。

やがてそこに若い教師に連れられた四人の役人がやって来た。彼らは国の天職管理局から派遣された試験官たちであり、そろって紺色の裾の長い官服を着ていて偉そうな三角帽子を被っていた。その試験官の一人、年長者の男が一同のまえに立って試験に当たったの所注意を読み上げた。その口ぶりはやはり偉そうであり、ジヨルフたちは黙って聞きながらも腹の中で舌を出していた。

「それでは諸君の健闘を祈ります。6時間後、この場でそろって会いましょう。」年長の試験官がそういうと他の三人が静かに動いて森の入口へと向かった。そして彼らが鮮やかな色彩の布を広げてどこのこののと呪文を唱えるとそこにむくむくと扉が現れた。扉は全体に群青色であり、中央には二本の剣が交差したような金色の紋章があった。試験官たちはその扉の具合を確認すると黙って後ろに下がった。ジヨルフはその奇妙な扉を睨んで唇を噛んだ。そして彼が目を転じるとさっきの試験官たちがこそそと懐中時計を見ている姿が見えた。

「1分前ですので扉を開きます。」試験官たちがそう言って扉を開けた。すると中から青い粒子のような眩い光が溢れ出たのだ。一同はそれを見てさらに緊張した。そしてついに試験官たちが号令を出すとは次々とその扉の中へと踏み込んだ。眩い光の粒子が渦のように飛び交う中、ジヨルフたちの視界はあつという間に消え去ってしまった。

ジヨルフが目を開くとそこは鬱蒼とした森の中であった。見上げるほどの巨樹は学校の裏手のものとは違うものであり、樹上からの日差しもさえぎるほどで不気味であった。そこには他の全員の姿もあって同じようにきよきよしていた。するとその中でシエロが勢いよく手を挙げたのだ。

「みんな、これからオレたちが封魔師となるための試験、最後の試験が始まる。分かっているだろうけど、森には多くの魔物^{モンスター}があるから……」シエロがそう言いかけるとグロッケンがそれを押し退けるよ

うにして踏み出した。シエロがそれに怪訝な顔をしてると、ジョルフがその先を指差した。

「もお出てるがね、あれはどうせウィスプじゃろ……」ジョルフはそう言っただけを緩めた。シエロが驚いて振向くと。そこにはいくつもの影が浮き出していてゆらゆらと揺れていたのだ。それを確認した一同はそろって銅剣を抜いて身構えた。

ウィスプとは白くてふわふわとしたマシュマロのような姿の魔物であり、大きな口からはべろりと舌が出ていた。それはすべての魔物の基礎と呼ばれる浮遊霊であり、『魔物分類額各論』や『魔物出没額』などのあらゆる教科書の最初のページに載っているものであった。ウィスプはそこにいた人間と同じ数だけ現れるとへらへらと笑うようにしてあたりを飛び交った。ジョルフたちは初めて目にする魔物の姿に対して一様に緊張して興奮していた。

「だあつ！」まずはジョルフが踏み出してその一匹に斬りかかった。その丸い刃先が打つとウィスプの身体はぐにやっと伸びて地面に落ちた。しかしそれはすぐに身体を弾ませてジョルフに体当たりしてきたのだ。ジョルフはそれを交わしながらさらに一撃を打ち込んだ。「ちよつとみんなつ、相手がウィスプだからって油断せんように……！」シエロはそうやって注意を促したが他の面々はそれぞれに飛び出してウィスプどもと格闘していた。

「おあつ……！」当のシエロはウィスプの一匹に頭を弾かれるようににして転倒していた。シエロはあわてて立ち上がったが、すぐに顔を弾かれてまたひっくり返っていた。

「じゃあなシエロ、試験が終わったら会おうや……」グロッケンはその言ってさっさと走り出した。

「おっし！まずは一匹終了つと！」ボラスもそう言って駆け出した。彼が剣を引くと、ウィスプの身体が破裂して煙のように消え去った。「ああつ、オレも行くわ……」ジョルフも転がるように立ち上がった。駆け出した。そうやって一同がそれぞれに散らばる中、シエロは険しい顔のままそれを睨んでいた。そして尻や桃の泥を払いながら

自分も走り出したのだ。

第2話 封魔師

封魔師とは魔物退治を生業とすることを許された唯一の天職者である。町や村などの居住区においては魔法や術式の類の使用が禁止されており、その得意まれなる剣術において速やかにそれらを排除すること、それが封魔師に期待されるすべてである。即ち、封魔師は魔物以外の何物も斬ってはならないとされている。それが封魔師という天職においての最大の法度である。

ジョルフは襲いかかってきた二匹のウィスプどもを倒した後、一息つこうと適当な倒木に腰をおろした。彼が布鞆の中から持参していたビスケットを取り出して二枚ほど口に入れた。それからほかの中身を確認しようと布鞆の中を覗き込んでるとあちらの草叢がガサガサと動くのに気付いた。

「なんか来たっけ……？」ジョルフは慌てて立ち上がって腰に下がった剣に手をやった。すると間もなくそこから大きなコオロギのような魔物が出て来たのだ。

「大コオロギか……」ジョルフは唇をなめながら剣先を突き出した。そこに現れたのはイヌほどの大きさがあるコオロギに似た魔物であり、ジョルフは頭の中で教科書を開いてそれについての特徴などを思い出した。そして相手の動きを睨むようにしてゆっくりと足を動かしたのだ。

「じゃあああつ……！」ジョルフは大きく踏み出して斬り込んだ。すると大コオロギは太い後ろ足で跳ねて身を交わした。ジョルフがそれを見ながら慌てて身体を捻ると魔物はそれよりも先に動いたのだ。「あ痛っ……がっ……！」魔物の大きな顎がジョルフの右の腕に噛みついてきた。ジョルフはそれを振り払いながら銅剣を左手に持ち替えた。そして素早く一撃を打ち込んだのだが、利き手ではないので

不十分であつた。

「くそお… ちょこちょこと動きやがってえ…」ジヨルフはそう言つて唾を吐いた。それに対して大コオロギがまた跳ねるとジヨルフは空かさずに右足を突き出した。彼がそうやって激しく蹴ると大コオロギはそこにひっくり返つた。ジヨルフはそれを見計らつて次の一撃を打ち込んだのだ。その一撃で魔物はついに動かなくなった。そしてその赤茶けた身体は乾いた土のように碎けて消え去つてしまつたのだ。

ジヨルフはまた倒木に腰掛けて布袍から薬草水の入ったガラス瓶を取り出した。そしてそれをさつき魔物に噛まれた傷口に塗り込むと傷も痛みもあつさりと消え去つてしまつた。

「ふう、また腹が減つたかも…」ジヨルフがそうやって布袍に手を入れてるとまたあちらの茂みがガサガサと騒ぎ出した。しかしジヨルフはそれが魔物の気配とは違ふと感じて下を出した。

「いやいやいや、どうげな調子かえ…」そう言つて登場したのはグロツケンであつた。彼は肩や腕に着いた落葉などを払うようにしてそこに立つた。そしてジヨルフに何か食料を分けてくれと言つて右手を差出したのだ。

「はあ？ もお無くなつたつや？」ジヨルフは驚いたようにそう言つた。するとグロツケンは冗談だと言つて笑つたのだ。そしてどうのこうのと言いながらその倒木に腰を下した。

「シエロのヤツ、どんげなつたやるか？」ジヨルフはビスケットを頬張りながらそう言つた。

「あん人は父親も母親も封魔師やしよ、自分が他とは違ふって意気込みがあつとやが。タズー先生もそこを指摘しよつたやる…」グロツケンはそう言つて苦笑いした。そして美味そうにビスケットを食べてる序流布のことを少し呆れたようにしてみていた。

「いくら食料持参は可だつて、なんでビスケとかチョコとかばっかりや？」具六件はそう言いながら懐中時計を取り出した。そして彼は残り時間を気にするようにしてまた首の骨を鳴らした。ジヨルフ

もそれに合わせて立ち上がると、それぞれの健闘を約束しながら別れたのだ。

ジョルフが森の中を歩いてると頬や手の甲にびりびりと震えるような感覚があった。ジョルフはそれこそが魔物の気配だと悟って胸躍らせた。彼はそつと身のの手首に触れてそこをシャツの袖の上からなでてみた。

ジョルフは茂みの手前で息を殺して背を屈めた。そのまま這うようにして茂みの中を進むとそこには魔物の姿ともう一人の誰かの姿とがあったのだ。

「サロカエくん… 眠らされてるじゃねえとけ…」 ジョルフは苦笑いしてそう呟いた。それはやはり同級生の一人であるサロカエ・カジリアツチであり、草の上で大の字になってくうくと寝ていたのだ。目を転じるとそこには大きなタマネギのような魔物の姿があってそのサロカエの寝顔を覗き込んでいた。ジョルフはそれがお化けタマネギという魔物であり、サロカエがその魔物の術によつて眠らされてるのだと確信した。

「とりゃあああ！」 ジョルフはいきなり飛び出した。そしてお化けタマネギに対して激しく斬りつけると、その赤茶けた皮が何枚も飛び散った。その瞬間、刺すような刺激臭があたりに飛び散った。ジョルフがそれに表情をゆがめるとお化けタマネギは小さな足で跳ねて体当たりしてきた。ジョルフがそれに怯むと、それは大きな口を開いて甘い息を吐き出したのだ。

「ぬぐうつ……！」 ジョルフはとっさに鼻や口を袖口で隠した。そして魔物の攻撃を交わすとさらなる一撃を打ち込んでやったのだ。剣先が鋭く伸びてお化けタマネギの丸い身体を斬った。すると魔物の肉体はどろどろの脂のように溶けて消え去ってしまったのだ。

「ふああ… ああ… あれ？ ジョルフけ？」 サロカエは身体を起こして目をぱちぱちさせた。ジョルフは銅剣を納めながらニヤリとした。「サロカエくん。このままずっと寝てたら試験終了までに出られん

かったがね……」ジョルフはそう言つて寝起きの彼の肩を叩いてやつた。するとサロカエも苦笑いして頭を掻いていた。

「そうやつつよ、去年もこれで失敗したかいよ……」サロカエはそう言つて立ち上がった。彼は去年の卒業生であり、ジョルフたちよりも先輩であつた。しかし、試験の前日に緊張しすぎて眠れなかつたなどの理由もあつて昨年の試験を失敗していたのだ。そのためサロカエは一年間の浪人生となつてジョルフたちとともに試験に臨んでいたのだ。

「さあ、時間は残り半分やわ。頑張つて行こうや！」ジョルフはそう言つてサロカエの背中を叩いた。そして白い歯をむき出しにして笑つてるサロカエに手を振りながらさつさと走り出したのだ。サロカエはそんなジョルフに手を振りながら大きな口を開けてあくびをしていた。

試験開始から5時間が経つていた。ジョルフはさんざん歩き回つて疲れも出ていた。それでもあと少しだと思ひながら意気揚々と歩いていった。やがて森が開けた場所に出ると巨木が倒れて道を塞いでいる場所に出た。ジョルフがそれを眺めながら遠回りするか乗越えるかと思案しているとそこに何かの気配があつたのだ。ジョルフはゆっくりと息を吐いてあたりを見回した。すると倒木の上に何かひよっこりと出て来たのだ。

「グリーンマジカ、これが最後つばいな……」ジョルフは日差しに目を細くしながらそう呟いた。そこに現れたのは緑色のローブを頭からすっぽりと被つた下級魔道士であり、自分の背丈ほどの櫛の杖を手にしてじつと立っていた。そのフードの中は真つ暗であり、ふたつの赤い眼だけが鈍く

光っていた。

「ふっ……！」ジョルフは息を吐いて先に飛び出した。するとグリーンマジカもそれを見ながらひよいひよいと跳ねた。そして銅剣を振りかざすジョルフに対して杖を突き出したのだ。グリーンマー

ジの背丈は人間の子供ほどであり、身のこなしは素早くて軽やかであつた。

「喰らええっ！」ジヨルフは魔物の頭を狙つて銅剣を振り下ろした。そして敵が怯んだのを見計らつて蹴りを入れたのだ。グリーンマージの身体は激しく飛ばされてあちらの倒木に激突した。

「んん？来るか？」ジヨルフは剣先を返して身構えた。するとグリーンマージは杖を頭上にまで振り上げてもう一方の掌を突き出したのだ。

「アチガ・アチガ・アチーガッ……！」グリーンマージは呪文を唱えて杖の先端を突き出した。するとそこから火の玉が弾き出されてジヨルフに向かつて飛んだのだ。ジヨルフはそれを承知していて身を交わそうとした。しかしグリーンマージが杖の先端を振ると火の玉はぎゅんと向きを変えてジヨルフの右足に当たつたのだ。それが破裂して火の粉が飛び散るとジヨルフは地面に転がりながら靴を脱いだ。それはグリーンマージが得意とする火球呪文であり、ジヨルフは初めて目にした本物のそれにすっかり仰天していた。

第3話 試験終了

魔封術専門学校は3年生になると実習授業が多くなった。ジョルフたちは実習室に集まって担当教師からの指導を受けると専用の道場へと移動した。そこは天井も高くて広々とした場所であり、壁際に目をやるとは木箱や練習用の木剣などが無造作に置かれてあった。「はい、それじゃあきょうは初日ということで、いよいよ銅剣を使用しての実技となります。くれぐれも気をつけて下さいね。」実習担当のオーセン・カバジェロはまだ若い教師であり、その声はとても弾んでいた。彼がそうやって指示すると学生たちは真新しい布に包まれたそれを受け取って紐を解いた。それらは銅製の剣であり、手元にはレミヤザ国の紋章が刻まれてあった。ジョルフもそれを手に取って面白そうに眺めていた。

「ほれっ、ほれほれっ……！」ジョルフはふざけてその剣先でボラスの尻を小突いてやった。するとボラスは笑いながら太い身体を捻ってみせた。

「こらつて、ふざけて人に向けるなって……」シエロは厳しい顔でそう言った。それに対してジョルフたちは怪訝な顔をした。するとシエロは目を閉じて息を吐いてその銅剣をゆっくりと腰のベルトに下げてみせたのだ。

「ま、それは打撃が専門やかいよ、そこまでは危険じゃねえが。」オーセンはそう言って笑っていた。するとジョルフたちはそれ見たことかとシエロのこと顔を見ていた。

やがてオーセンは壁際の戸棚からいくつかの壺を出して来た。そしてそれらのラベルを確認して一本を選んで足元に置いた。そしてオーセンはそれが実習用の道具であり、呪術師によって作られたものだと説明した。

「じゃあですね、初日ということで基本系のウィスプからいこうと思います。」オーセンはそう言つて壺の封印を解いた。するとそこからどろどろの脂のようなものが吹き出ると、それは丸く固まって白くなってウィスプの形となったのだ。それは魔物そっくりに作られた粘土人形であり、ふわふわと浮き上がってそれと同様の動きを見せた。ジヨルフたち一同は教科書の絵図でしか見たことのなかったそれを見てとにかく興奮していた。

「じゃあですよ、誰かさっそくやってみたい人、いますか？」オーセンがそういうと誰よりも先にシエロが手を挙げた。そしてずんずんと進み出てさっそうと銅剣を抜いたのだ。

「おう！がんばれよシエロお！」後ろに控えたジヨルフたちはからかうようにしてそう言った。シエロはそれを鼻で笑うようにして造り物のそれと対峙した。

実習が始まって一月ほど、担当のオーセンはいよいよ魔法を使う魔物との実戦を提案した。一同が緊張する中、オーセンはまた壺を取り出してどろどろの脂のようなものを出した。

「火球呪文、冷氣呪文、疾風呪文……魔法の基本系統については十分に学んでと思いますが……」オーセンがそう言つてるとどろどろの脂は粘土人形のようになって立ちあがった。そしてそこに緑色のローブを頭からすっぽりと被った魔物が姿を現したのだ。

「まずはグリーンマジだな。じゃあ、目が合ったんでジヨルフから行こうか。」オーセンはそう言つてジヨルフのことを指差した。ジヨルフは唇を噛みながら踏み出した。そしてゆっくりと銅剣を構えてそれと対峙したのだ。

「相手の背丈とか身体の角度とかよく見定めろよ。そんな構えじゃと右足が出遅れることねえか？」オーセンはそうやって指導した。ジヨルフはそれに従つて右足を少し踏み出した。そして相手の動きに合わせてるようにして息を吐いていよいよ飛び出したのだ。

ジヨルフが脱ぎ捨てた右の靴は草むらに転がって煙を吹いていた。

ジヨルフはもう一方の靴も脱いでだしで立ち上がると、実習の間でのそれとの退治を思い出して策を練った。対するグリーンマジは倒木の上に立って身体を揺すっていた。ジヨルフはそれを睨みつつ、グリーンマジの魔力がさほどではないので火球呪文もあと二発か三発しか使えないはずだと考えていた。

「アチガ・アチガ・アチーガっ！」グリーンマジはさらに呪文を唱えて火の玉を放った。ジヨルフはだしで地面を蹴ってそれを素早く交わした。そして草叢を転がるようにして飛び出すと、そこにたつ魔物を狙って剣先を突き出したのだ。

「おおおおおオッ！」ジヨルフの一撃が魔物の身体を弾いた。グリーンマジはそれに怯みながら杖を振り上げた。するとジヨルフはそれを狙っていたかのように蹴りを入れてやったのだ。

「行動学は頭に入ってるつつよおっ！」ジヨルフはそう言い放ってさらに剣先を突き出した。それが魔物の胴体を貫くとあたりに黒い油のような血飛沫が飛び散った。そしてグリーンマジはぐったりと動かなくなり、最後には緑色のローブと肉体とがどろどろに溶けて消え去ってしまった。

「はあはあはあ… とりあえずやったかあ…」ジヨルフは息を荒げながら膝を折った。そして倒木の上から滑り落ちるとさらに何かの気配があるのに気付いた。

ジヨルフがそこに行ってみると茂みの中にキラキラとした光の渦があった。ジヨルフがそれを見ていると、光の渦が激しく回転して真っ白の扉が現れたのだ。ジヨルフは大きく息を吸い込んで懐中時計を見てみた。すると残り30分ほどという時間であり、ジヨルフはどうやら間に合ったと息を吐いた。そして彼が扉を開けてみるとそこには眩い光があって細かい粒子を集めながら渦巻いていた。彼がそこに踏み込むと、やがてその先に緑の風に吹かれた学校の裏庭が現れた。ジヨルフはそれを確認すると跳ねるようにして駆け出した。

「おお！あんたが三番目やわ！」そう言ったのはグロッケンであり、

振向いて見るとそこにはサロカエの姿もあった。彼らがいうに、最初に出て来たのがグロッケンで次がサロカエだったという。

「サロカエくん、無事に終わったごつあんえね！」ジョルフは彼がお化けタマネギによって眠らされていたのを見かけたという話をし
てやった。

「おいってえ、みんなには言うなよってえ！」サロカエは白い歯を
むき出しにしてゲラゲラと笑った。

「こらサロカエっ！また居眠りかっ！」グロッケンはそう言ってサ
ロカエのことを羽交い絞めにした。そして彼が脇腹などをくすぐる
とサロカエはまたゲラゲラと笑い出した。ジョルフはそれを身なが
らほつとしたように息を吐いた。

それから間もなくボラスが出て来た。彼がほつとしたように大き
な身体を伸ばしていると次々と三人ほどが出て来た。そして残り時間
が10分となったころ、まだ出て来てないのは二人だけとなった。
離れた位置に座ってそれを見守っているタズーも気が気ではない様
子で時計ばかり見ていた。

「シエロとアロアが残ったかあ……」タズーはそう呟いてまた目を閉
じた。アロア・ベルウッドとは女子学生であり、普段から大人しい
性格で封魔師にはむいていないのではないかという懸念もあった。
担任であるタズーとすれば全員の無事の終了を望むばかりであつた
が、その中でもアロアについては特に気にかけていたのだ。そして
それと同時にシエロがまだ出て来ないことも気になっていた。

やがてまた扉が開いて転がるようにしてアロアが出て来た。彼女
はもうすっかり泣きそうな顔であり、他の女子学生二人に出迎えら
れるとぼろぼろと涙を零していた。そこにボラスが歩み寄って声を
かけようとしてるとまた扉が開いたのだ。

「いや、別に時間を競うもんじゃねえし、何をそんげ驚いてるとや
？」それはシエロであり、実にゆっくりと出て来て首をかしげてみ
せた。そして懐中時計を取り出してまだ5分もあると言って笑った
のだ。

「お疲れさん、最後はグリーンマジやったけ？」ボラスがそうやって声をかけた。するとシエロはそうだと言って頷いた。

「はいはいはい、あんたがどっかでくたばってるんじゃないかって話やったとやが！」グロッケンはその言うてシエロの背後に立って首に腕を回すような真似をした。

「だからっ、オレの後ろに立つなっつのよぉ！」シエロはそう言うてグロッケンの足元を蹴った。それでもグロッケンが捕まえようとするとシエロは慌てて逃げ出した。ジヨルフはそれを眺めながらほっとしたように笑っていた。

やがて試験官たちが立ち上がって試験終了の鐘を鳴らした。そして彼らは手元の採点表を見比べながらしばらく話合った。その間、ジヨルフたちは一様に黙っていて結果が出るのをじっと待っていた。「ごほん、それでは皆さん、よろしいでしょうか…」年長の試験官がそう言うと同様はそこに整列した。様子を見ていたタズーも堅い表情で立ち上がった。

「とりあえず違反行為などは見られなかったようですし、試験は無事に終了となりました。ここにいる１１人が無事に合格ということでしょう。あとは学校のほうで認証式のほうを…」試験官がそう言いかけた途中でまずはグロッケンが歓喜して拳を突き上げた。それに続いてジヨルフやボラス、あるいはアロアまでが飛んだり跳ねたりして喜びを表現していた。するとタズーがそれを注意して試験官に頭を下げていた。

「おいっ、まだ話が途中だぞ…」タズーはそう言ったが一同はもうすっかり大騒ぎになっていた。タズーは試験官たちに対してまた頭を下げた。

「いやいや、若者は元気があつてよろしいじゃないですか。彼らには未来がある、かしこまることはないでしょう。」年長の試験官はそう言うて笑っていた。そしてあとのことは学校のほうで宜しくお願ひしますと言ってさっさと立ち去ったのだ。年長の試験官がそう

するとほかの試験官たちもぞろぞろとそれを追った。タブーなど教師たちがそれを見送る中、それでもジョルフたちは無事の終了に歡喜して大いに騒いでいた。

第4話 ジョルフと仲間たち

三日後、魔封術専門学校は卒業式の日を迎えていた。ジョルフたち卒業生と在校生、そしてすべての教職員が講堂に集まって式典に臨んでいた。その壇上には国から派遣された神官が登場して卒業生たちに封魔師としての天職を捧げる儀式を執り行っていた。神官は全体に赤い法衣と赤い帽子であり、一人一人にそれを捧げるための祈りを捧げていた。

「ジョルフ・アバーナシー殿…」神官が名前を呼ぶとジョルフは立ち上がった。そして彼が壇上に上がって方ひざをつくと神官は大きく手を広げた。すると頭上から青くて美しい光が放射されてジョルフの全身を優しく包み込んだのだ。ジョルフは片膝について俯いたまま身震いしていた。

「さあ、あなたはこれから天より与えられし職のひとつ、封魔師としての道を歩き始めるのです。その初心を忘れずに精進してください。」神官がそうやって言葉をかけるとその後ろに控えていた助手の神官が紫の布に包まれた品々を差し出した。そののひとつは真新しい鉄剣であり、もうひとつは封魔師の書、そしてもうひとつは封魔師を模った紋章が施されたメダルであった。それらすべてが封魔師、天職者となった証であり、ジョルフたちはそれらを手にしていずれも誇らしく胸を張っていた。

式典を終えた面々は教室に戻って談笑していた。そこでジョルフとボラスとは互いの封魔師の書を見せ合った。それは封魔師たちが退治した魔物についての記録や絵図が記されるものであり、全体として白いページだらけであった。しかし最初の何枚かには彼らが試験で退治したウィスプなどについてがすでに記録されてあったのだ。「あれ、そんなミミズには遭ってねえわ…」ジョルフはボラスのそ

れを覗き込みながらそう言った。

「森の中にはおそらく20種類はいたはずやかいよ、そこで時間内に7割か8割と遭遇して退治すれば良かったわけやしね。」ボラスはそう言いながらジョルフのそれに記録されていたお化けタマネギに目をやった。そして自分もそれとは遭ってないと言った。

「ところでよ、こんメダルってどんげやって保管すつとが正解やとけ？」グロッケン是指先でそれを挟みながらそう言った。

「あらグロッケン、ホクリバの田舎にでも帰って実家の物置にでも隠してたら？」そう言ったのはそれまでアロアたちと談笑していたミレーヌであった。彼女がいたずらっぽくそう言つとグロッケンはどうのこうのと言い返して苦笑いした。するとミレーヌはグロッケンの頭を小突くようにしてあっちに行つてしまったのだ。

「結局よ、あん二人ってどんげやったとけ？」ジョルフは小声でそう言った。

「んんん、3年のときにつき合いするような話あったけど、いまはどんげやつちゃろ……」ボラスはそう言つて首を捻った。

「何何何？ ミレーヌとグロッケンがどんげしたって？」そこにいきなりシエロが現れて彼らの間に割つて入った。ジョルフがそれについて話してやるとシエロは何も聞いてないと言つて目を丸くしていた。

「何もつて、オレらだって知らんことくらいあるやろ……」ジョルフは苦笑いしてそう言った。それでもシエロは慌てた様子であり、あちらにいるグロッケンとミレーヌ、それにもう一人の女子であるイザベルとの間を行ったり来たりしていた。ジョルフとボラスとは顔を見合せて首を捻っていた。

教室には担任のタズーが現れて最後の時間を迎えていた。タズーは卒業生たちに祝福の言葉を述べるとあとはほっとしたようにに表情を緩めた。そして鼻の下にたくわえた鬚をいじくりながら手元の資料に目をやった。

「さてと、次はおまえたちの就職だな。それをすべて無事にすませ

るまでが担任としてのオレの仕事だ。」タズーがそういうとそれまで朗らかに緩やかにしていた面々がとりあえず姿勢を正した。タズーは資料に書かれたそれぞれの希望を見ながらそれを確認する作業に入った。

「シエロとグロツケンとはシーガルナに行くということだが、それで間違いないのか？」タズーがそういうとグロツケンは振向いてシエロの顔を見た。そして二人そろって間違いないと返した。シーガルナとは海沿いに造られた保養地であり、シエロの父親がそこで魔封術隊の隊長を任されていた。シエロは父親の紹介もあつてグロツケンと二人でそこに行くことをずいぶん早くから決めていたのだ。もちろん、ジヨルフやばら巢もそれに誘われていた。しかし彼らはほかに希望があつたのでシエロの誘いを断つていたのだ。

「んで、サロカエはスーギン老師の封術院ということだが、心構えはできてるのか？」タズーがそういうとサロカエは大きく頷いた。スーギン老師とはこの国で最も偉くて強いとされる大剣豪であり、そのスーギンの封術院は古くから多くの先輩たちが所属していた。しかしその一方でそこに所属する封魔師たちはその扱いの悪さから“スーギンの奴隷”と呼ばれて揶揄されることも多かった。

「そして、ミレーヌとネロ、ジヨルジュは国外に出るという希望だが……」タズーがそういうと誰よりも先にグロツケンが顔を上げた。そして彼が慌ててミレーヌのを見ると彼女はニコニコと笑って頷いた。グロツケンはそれについてまるで承知してなかったものですっかり動揺していたのだ。

「そして最後は教会勤務が希望のジヨルフとボラスとだな。これから求人情報を取るが、それで間違いないか？」タズーがそういうとジヨルフたちも顔を見合せて頷いた。するとタズーはこれですべての確認が完了したと資料を閉じた。

「いいか、就職先が決まるまでは勝手な行動をされても困るんだぞ。下手に冒険に出たりして問題にならないようにしろよ。あとあと面倒なことになったりするんだぞ。」タズーは念を押すようにしてそう

いった。すると供託のまえの席に座っていたジヨルフが後ろを向いて具六件などのことを指差した。

「特にジヨルフ、お前が一番危ないんだぞ……！」タズーはそう言っ
て供託を鉛筆で小突いた。すると教室はどつと沸いて笑いに包まれ
たのだ。それからタズーは以後の就職活動などについて説明してか
ら教室を立ち去ろうとした。

「先生つ、ちょっと待って下さいっ！」そう言っ
て立ち上がったのはイザベルであり、それに続いてアロアとミレーヌも立ち上がった。
そしてそれに合わせて廊下に出たシエロが花束を持ってきてタズー
に差し出したのだ。一同がそれを見て立ち上がった手をたたくとタ
ズーは照れたように頭を掻いた。

「おいおい、オレみたいなごつごつした男に花束なんて似合わんぞ……」
タズーはそう言っ
て花束を抱きかかえた。すると今度はジヨルフが合図して一同が教室の入口に並んだ。タズーがそれに驚いてる
とジヨルフたちは一人一人手を出して恩師のことを見送ったのだ。
タズーは照れたように笑いながら教え子たちに見送られるのであつ
た。

卒業生たちはそれぞれに散らばり、世話になつた教職員に挨拶を
したり寮生活をしていた面々は部屋の片付けをしたりと忙しくして
いた。ジヨルフもそうであり、あれこれが終わって学校の門に出た
のは昼下がりのことであつた。彼がそこに行くと、門柱のあたりに
はグロッケンとサロカエ、それにボラスの姿があつてわいわいと話
していた。

「なんけ、あんたミレーヌのこと知らんかったつけ？」ジヨルフは
からかうようにしてそう言つた。するとグロッケンはいちいちそこ
まで感知するわけがないと言つて苦笑いした。

「ジヨルフ、それよりもシエロを見らんかったけ？」ボラスがそう
言つた。

「ああ、謝恩会に呼ぶ先生たちに最後の確認とか言つて走り回りよ

ったわ。そういうのはあん人に任せとくのが一番やる。」ジヨルフはそう言って笑った。そしてグロッケンに対し、ミレーヌは謝恩会に来るのかと言って笑った。

「来るやる、卒業生やつちやし、何を勘繰りよつとや？」グロッケンはそう言って呆れたように笑った。ジヨルフもそれに合わせて笑った。

「あ、シエロが来たがね！」サロカエがぴょんぴょんと跳ねるようにしてそういった。彼が指差したほうを見ると、そこにはシエロともう一人とが何かを喋りながらやってくる姿があった。もう一人はカトバンという卒業生の一人であり、ジヨルフたちよりも十歳ほど年上であった。カトバンはいわゆる中途転職の学生であり、かつては料理人であった。カトバンは若い同級生たちにあれこれの大人の世界を教えてやった存在であり、今夜の謝恩会についても誰よりも楽しみにしていたのだ。

「カトバンさん、今夜は心置きなく飲めるツスね！」具六件がそう言って手を振った。

「いやいやいや、卒業までの一年間、禁酒禁煙してたしね、みんなで朝までやろうじゃないのよ！」カトバンはニヤニヤと笑いながらグロッケンやジヨルフの肩に腕を回した。その中でも特に酒好きのグロッケンも同様にニヤニヤしていた。

「さて、そろそろ行こうかね。」ジヨルフはそう言って跳ねるように身体を捻った。するとグロッケンもシエロも立ち上がり、ボラスも同じように荷物を担いだ。そして彼らはそろって振向いてそこから見える魔封術専門学校の校舎などに目をやった。そして五年間の学生生活を振返ってそれぞれに胸を暑くしているのであった。

第5話 ジョルフの帰郷

レミヤザ王国の東部最大の都がノベルオックであった。ここは古くから炭鉱の町として栄えた土地であり、多くの市民がその労働者やその家族であつたりと何かしらのかわりを持って暮らしていた。そこがジョルフの故郷であり、彼は年末以来の帰郷をはたしていた。乗合馬車は述べるおっ区大門の中で停まつた。ジョルフが切符を出してそこで下りると多くの馬車や牛車、あるいは大きな荷物を担いだ旅人らが行き交う姿が見えた。ジョルフは大門を抜けてその先にある広場に出るとそこから見える町並みを眺めて大きく息を吸い込んだ。

「ふう… また少し寂れたかあ？」ジョルフは背伸びでもしながらそう呟いた。そこから見える広場には宿屋や銀行などが連なつており、その先にはいくつかの商店街が延びていた。しかしその中にはすっかり扉を閉ざしてしまつてゐる店もあり、ジョルフが子供のころに見ていた賑やかな町並みとはずいぶんと違つていた。あるいはそこを行き交う炭鉱の労働者たちの姿もずいぶんと少なくなつてゐるうにも見えた。ジョルフが目を転じるとそれら中心市街地の向こう側にはいくつかの煙突が立つていて灰色の煙を噴いていた。また、遠くからはトロツコが走るガタガタという鈍くて古い音が聞こえたりしていた。それらはここが炭鉱の街である証であり、それらに触れるとふるさとに帰つてきたことが実感できたのだ。

ジョルフの実家はマヤミットという川沿いの丘陵地にある町にあつた。彼の父親のサミュエルは炭鉱で働く技士であり、母親のロレインもその中にある食堂で働く身であつた。両親は長男であるジョルフの無事の卒業に大喜びであり、さつそく親戚を集めての祝宴を催してくれた。ロレインは次男のトビーに酒屋に行くように言つて三男のミルトンには叔父の家にそれを伝えに行くようにと言つた。ジ

ヨルフの二人の弟たちも兄のそれを誇らしく思っており、跳ねるようにして家を飛び出した。

やがて日が暮れると祝宴が始まった。ジョルフの叔父や叔母たちも上機嫌であり、弾むように喋って跳ねるように酒を飲んでいた。叔父のシャイマスが饒舌の話すとその傍らに座る妻のマギーが呆れたようにたしなめた。するとサミュエルがいいじゃないかと言って笑ってみせるのであった。

「ジョルフ、そんな封魔師になった証とかを見せてあげなさい……」父親は嬉しそうにそう言った。するとジョルフは照れたように面倒そうにしながら立ち上がってメダルなどを見せてやったのだ。叔父と叔母とは物珍しそうにしてそれを見ていた。

「ジョルフ、お祝いは何がいいか？ 新品の剣とかは高えつか？」すっかり酔っぱらった叔父が大笑いしながらそう言った。それに対してジョルフは苦笑いして、剣はいろいろ種類があるので大丈夫だと遠慮した。

「なんかですよ、剣は自分たちの身体に合ったものとか、いろいろ難しいそうですね。友達の鍛冶職人に頼むようなこと言ったですよ。」母親が申し訳なさそうにそう言った。ジョルフもそのつもりだといって頷いた。すると叔父はさらに大きな声になり、だったら靴か鞆を買ってやると言って笑っていた。ジョルフはとにかく頭を掻きながら笑ってるばかりであった。

翌日、ジョルフの姿は街角の居酒屋にあった。そこで彼は幼いころからの友人たちと集まって旧交を温めていたのだ。彼らはいずれも中等学校の同級生であり、ジョルフと同様にこの春に天職を得た面々ばかりであった。彼らはビールで乾杯して次々に料理を注文して大いに語らっていた。

「あれけ、ピノはいつまでノベルオックにおつとけ？」鶏肉の揚げ物を食いちぎりながらそう言ったのはヒヤルクド・パッカードである。彼は占星術師という天職を得た身であり、何やら嬉しそうにしてそ

う言っていた。

「ああ、とりあえず月末に出発する予定やわ…」そう返したのはピノ・ベンクである。ピノもやはり地元の学校を出て鉱山士という天職を得たばかりであった。

「ところでジヨルフ、トルザックはどんげしたつけ？」ピノは渋い顔でそう言った。

「昼間にオバちゃんと会ったから言つといたんやけどよ、なんかまだ家に帰ってねえって話やつよ。」ジヨルフは困ったような顔をしてそう言った。するとヒヤルクドは目を細くしてだったらトルザックの居場所を調べてみようと言った。

「じゃあブリートくんは？」ピノはさらにそう言った。

「あん人は留学が決まったらいいかいyp。ファントラスの大学らしいから家族そろって大忙しみたいよ。」ジヨルフがそう返した。

「ブリートくんはいいがね。あんヒトは面倒臭えかいよ。」そう言ったのはヤンベル・ベレッタである。ヤンベルは垂れた前髪を掻揚げながら煙草の煙を吹いていた。彼もまた、地元の学校を卒業して狩人となったばかりの身であった。ヤンベルがそうやって不快そうな顔を見るとジヨルフもピノも黙ってしまった。

「それよりもよ、バザルデはまだ来んとけ？」ジヨルフはそう言って入口の方に首を伸ばした。

「あん人は仕事で遅れるげなつて、この街じゃ鍛冶職人なんていくらいても手が足らんぐらいやかいよ。」ヤンベルはそう言ってまた煙草の煙を噴いた。するとヒヤルクドがそれを嫌って煙を払うような仕種をした。

「仕事って親父さんのけ？」ピノが驚いたようにそう言った。するとヤンベルはそうらしいと言ってまた煙を吹いた。その話にピノもジヨルフもすっかり呆れていた。

「おう、じゃったらバザルデの居場所を見てみようか…」ヒヤルクドがそう言ってひざを叩いた。

「あんたさっきから何言よつとけ？ まさか人探しの術でもすつと

け？」ヤンベルが首を捻りながらそう言った。するとヒヤルクドは細い目をさらに細くしてニヤニヤと笑った。

ヒヤルクドは足元に置いていた鞆から紫色の布袋に入った球体を取り出した。それは新品の水晶玉であり、ヒヤルクドの掌に乗るほどの大きさであった。彼はそれを占星術師となった祝いに購入したのだと言ってテーブルの上にそっと置いた。そして自分たちの術式の基礎の基礎である星のコンパスという術式を試してみると言ったのだ。

「じゃあよ、とりあえずトルザツクの生年月日とか細かい情報を言ってくれないよ。」ヒヤルクドはそう言って水晶玉に手を翳した。するとジョルフたちは面白がってそれぞれにそれを口に出した。ヒヤルクドはそれにうんうんと頷きながら目を閉じた。そして何かをぶつぶつと呟きながら水晶玉に翳した手を動かしてみたのだ。

「ぬん？ これはどこや？」やがてそこにどこかの風景が映し出された。しかしそれは闇夜に浮かぶ影だけの風景であり、それがいったいどこなのかはさっぱりであった。

「どっか外にあるとやねえけ？」ジョルフはそう言った。

「なんけ、ぜんぜんダメじゃねえけ……」ヤンベルは呆れたようにそう言った。

「……じゃ、じゃあよ、バザルデの生年月日を言ってくんない……」ヒヤルクドは苦笑いしてそう言った。するとジョルフたちはまた面白がってそれぞれにそれを口に出した。

「おおつ、今度のはどこけえ？」ジョルフは顔を突き出してそう言った。水晶玉にはどこかの土手に空いた洞穴のようなものが映っており、その入口では二本の松明が燃えていてあたりを明るくしていた。それを見たピノ渋井顔をしてどこかの坑道ではないかと言った。「あれじゃろ、ペリカン橋のとの洞窟じゃろ……」ヤンベルがそう言った。彼は押さないころから父親とその近くでよく釣りをしていたのでよく知ってるのだと言った。

「その洞窟にはヒカリゴケが群生してるらしいかいよ、バザルデ

もそれを採りに行つたとやが……」ヤンベルはそう言つて煙草の火を消した。その話に他の三人も納得していた。

「ねえ、この穴の手前にあるのつてリュックじゃねえとけ？」ジョルフがそう言つてそれを指差した。一同がそれに注目すると水晶玉に映つていた映像はうつすらと消え去つてしまった。ヒヤルクドはこれが占星術師に成立ての限界だと言つて水晶玉を片付けた。

「ヒヤルクドのそれつてどれくらいの確率で相手の居場所がわかるとけ？」ピノがいぶかしむような顔をしてそういつた。

「そりゃあ、世界の果てにあるような見知らぬ人までは無理よ。じやけど少なくともノベルオツクにおける顔を知った人ぐらゐは間違ひねえつて……」ヒヤルクドはそういつて唇を曲げた。それでもピノは占星術師のそれを信用できないと言つて首を傾げていた。

「じゃあよ、ヒヤルクドの星占いが当たつてるかどうか確かめに行こうや……」ジョルフはニヤニヤしながらそう言つて立ち上がった。

そして傍らの壁に立てかけておいた剣を手に取つたのだ。

「はあ？あんた何言よつとけ？」ヤンベルが驚いたようにそう言つた。するとそれに続いてヒヤルクドまでが立ち上がったのだ。

「みんなで行こうや、バザルデがあるかどうか見に行こうや！」ヒヤルクドは腰に手を当ててそう言つた。しかしヤンベルもピノもやめておいたほうがいいと言つて立ち上がらなかった。ジョルフは彼らの腕を引っぱつて強引に連れ出そうとしたが、それでも二人はせっかくみんなが集まつてゐるのだから嫌だといつていた。

「じゃあよ、バザルデがあるかおらんか賭けようや。ここの代金全額でいいこつせん？」ジョルフがそういうとヒヤルクドも面白そうだと言つて頷いた。しかしそれでもヤンベルとピノとはどうのこうのといつてそれを拒否したのだ。

第6話 川沿いの洞窟

そこは市街地から外れたホーリル川の川沿いであり、ペリカン橋の上から見下ろせる場所であった。ジョルフとヒヤルクドは土手を駆け下りてその洞穴の入口へと向かった。そこには水晶玉に映し出されたものと同様に松明が燃えていてジョルフが指摘したようにひとつのリュックが落ちていたのだ。

「ヒカリゴケを採りに入ったとして、こんなとこに荷物を置いたりするやるか？」ヒヤルクドはそれをつま先で小突きながらそう言った。

「さらにいうとやね、夜間の洞穴なんて魔物がうようよしていて当然やしよ。鍛冶職人であるバザルデであつてもそれぐらいは知ってるはずやとよ。」ジョルフはそう言いながら身体を捻った。そして洞穴の中を覗き込むとそのままとこと中に踏み込んでしまったのだ。ヒヤルクドもやはりニヤリとしてそれを追いかけた。

洞穴の中はよく人の出入りがあるとあつて足元や壁などが整備されてあつた。ジョルフたちはランプを下げてその中をてくてくと歩いた。先を歩くジョルフはすっかり得意げであり、こういう状況で現れると予想される魔物について解説を始めていた。

「魔物つてのは闇の世界のものやから、基本的には人間の心に引かれて姿を現すわけよ。恐怖や憎悪、強欲、憤怒、そうした感情に闇の力が反応して……」ジョルフはそう言いながら立ち止まった。そしてランプの灯りであちらの岩場を照らしながら何かの気配があると言ったのだ。

「おおっと、大ミミズやわ……！」ジョルフはそう言つて腰の剣に手をやった。その岩陰からにゅうつと出て来たのは大きなミミズの化物であり、それは太くて長い身体をくねらせるようにして全体を現した。そしてまるで犬のような口を開いて涎を垂らしたのだ。それ

は全部で三匹であり、ジオルフはそれを確認してニヤリとした。

「あれはただイヌみたいに噛みついてくるだけやからよ、あとはどたばたと暴れるのに気をつければいいわ……！」ジオルフは背後のヒヤルクドに対してそう言った。ヒヤルクドはそれに頷くと手にした槍の棒をぶんと突き出してみせた。

「やああつ！」まずはジオルフが飛び出した。彼はとにかく新品の剣を試してみたくてたまらなかったのだ。彼はとにかく鋭く飛び出すとその剣先で魔物の首筋に斬りつけた。大ミミズはそれに怯んだがすぐに太い身体を伸ばして頭突きをしてきた。ジオルフはそれを腹に食らって身を振った。

「ていうか、ぬめぬめして気持ち悪いわあ……」ヒヤルクドはそう言いながら棒をぶんぶんと振り回していた。そして大ミミズの一匹を追いつめたのだが濡れた地面に足を滑らせて転倒してしまった。

「おおあああ……わああつ……！」ヒヤルクドが転ぶと大ミミズがイヌのように吠えて噛みついてきた。ヒヤルクドは慌てて足を突き出したが大ミミズはしつこく噛みついてきたのだ。

「でええいっ！」そこに飛び込んだきたのはジオルフであり、彼の振り下ろした剣先が大ミミズの首を切断した。魔物が泣き叫ぶような声を出して地面に崩れた。そして魔物の身体はどろどろの黒い脂のようになって溶けてしまふとヒヤルクドは目を丸くして腰を抜かしていた。

「おお、やっぱ銅剣とは違うわあ、すばつと斬れるって感じやわあ……」ジオルフはそう呟きながらまた踵を返した。そして背後にいたもう一匹に対しても一撃を打ち込んだのだ。ジオルフはすっかり嬉しそうであり、ヒヤルクドもそれを見て大きく息を吐いていた。彼もまた、初めて目にするそれらにすっかり高揚してる様子であった。

二人は岩場に腰を下ろして一息ついていた。ジオルフは鶴儀の刃先を専用の布で拭きながらやっぱり満足そうにしていた。一方でヒヤルクドは魔物に噛まれた右の腕に薬草水をかけていたが、破けた

シャツがもとに戻らないので渋い顔になっていた。

「やっぱりオレたち占星術師に武器を使った戦闘は不向きやね。」

ヒヤルクドはそう言いながら杓の棒を手元で回して遊んでいた。

「ヒヤルクド、なんでここに来ようと思ったとけ？」ジヨルフはそう質問した。

「だから、自分の占った結果が当たってるかどうか確認するためやが……」ヒヤルクドはすました顔でそう言った。

「まあ、いいけど、魔物との闘いでもっと大きなケガしても知らんぞ……」ジヨルフはそう言いながらひょいと立ちあがった。そして彼が格好つけたように剣を鞘に納めるとヒヤルクドもそれに合わせて立ち上がった。

「ふん、まあ次を見ときないって……」ヒヤルクドはそう言っただけを緩めた。そして右の拳を突き出すようにしてそこにはめられた青色の石の指輪を見せたのだ、ジヨルフはそれを見て首を傾げた。するとヒヤルクドはそれが水晶の指輪だと言って胸を張ってみせた。

二人がさらに奥へと進むと足元に水溜りがあったり天井から水が落ちたりする場所に出た。ジヨルフはそうやって状況が変わったので出てくる魔物の種類も変わるはずだと言いながら歩いていった。すると間もなく背後の暗闇に何かの気配を感じて立ち止まったのだ。

「出えた、ルツカーやわ……」ジヨルフは嬉しそうな顔をしてそう言った。一方でヒヤルクドはそこに現れた異形の魔物に目を丸くしていた。それは大きなオレンジに短い手足が生えたような形であり、身体の前面には大きな一つ目があってこちらをじろと見ていた。ジヨルフはさっそく剣を抜いてそれと対峙した。するとルツカーは丸っこい身体を弾ませるようにしてこちらにやってきたのだ。

「おおっ……ととっ……！」ジヨルフは足下の水溜りに気を配りながら敵の攻撃を交わした。するとルツカーはニヤリとして身体を縮めた。そして短くて細い脚をぎゅんと伸ばして弾丸のように飛び出したのだ。ジヨルフはそれに対して剣先を突き出した。それに対して

ルツカーは地面を転がるようにして間合いを取った。

「でやああ…… ああっ！」 ジョルフが飛び出そうとした瞬間、ルツカーはその大きな一つ目から眩い光を放ったのだ。 ジョルフがそれに目が眩んで蹲った。するとルツカーは嬉しそうにして身体を弾ませたのだ。

「くう…… これがあるから気をつけてくんないよ……」 ジョルフは顔面を押さえながら片膝を折ってそう言った。するとヒヤルクドが首を傾げながらひよいひよいと出て来たのだ。

「目から光を放つのか、だったらオレに任せてみない……」 ヒヤルクドはそう言って右の拳を突き出した。そして彼が両方の足で踏ん張るようにして身構えると指輪の青い石がキラキラと光り出したのだ。 ジョルフはいったい何事かと目を見開いた。

「おあつと……！」 次の瞬間、ヒヤルクドの指輪から青い閃光が放たれて魔物の身体を撃った。しかしそれと同時にヒヤルクド自身も腰を抜かしたようにしてひっくり返ってしまった。

「ははは、初めてやってみたけど、やっぱり星の力はすげえわ……」 ヒヤルクドはそう言った。彼がいうに、その指輪の水晶には星の光が溜め込まれていて、いまのはそれを放出する術式だというのだ。 ジョルフは初めて目にした異業種の戦術にすっかり驚いていた。

「よし…… あとはオレに任せときない……！」 ジョルフはそう言いながら立ち上がった。そしてあちらで転がっているルツカーに対して斬り込もうと踏み出したのだ。

ジョルフとヒヤルクドはすっかり腹も減ってしまっていてへろへろになっていた。彼らは大きな水溜りの淵に腰を下ろしてたいした支度もなくこのような場所に来たことを反省していた。そしてジョルフなどはバザルデの姿が見つからないことを不安に思い、ヒヤルクドのやった星のコンパスなる術式は正しかったのかと疑問に感じていた。

「たとえばよ、バザルデが荷物だけ忘れてもう帰ってるとか、そう

いうことはねえとけ？」ジヨルフは険しい顔をしてそう言った。

「まあ、星のコンパスをやったのが2時間くらい前やとして、その時点ではここにおったことは確実やろうけどね。」ヒヤルクドはあくまでも自信たっぷりにそう言った。そして彼が小便がしたくなつたとふらふらと立ち上がるとジヨルフが慌てたように脚を伸ばした。「アホっ、魔物が出てくるがっ……！」ジヨルフがそう言つて脚を伸ばすとヒヤルクドは股間を押さえながら仰け反った。そしてジヨルフが大きな水溜りを指差すとその水面からぶくぶくと泡が噴き出してきて黒い影が出来たのだ。

それは大力ワウソという魔物であつた。それは全体に青黒い濡れた毛に覆われた身体であり、後ろ足と太い尾とで立ち上がるとジヨルフたちと変わらないほどの背丈であつた。大力ワウソはしゅるしゅると喉を鳴らして怒ってるようであつた。

「オマエがこで小便しようとするっから……まあいいわ……！」ジヨルフはそう言いながら剣を構えた。そして濡れた槌を蹴って飛び出した。すると大力ワウソはそれより先に青黒い身体を伸ばすようにして飛び出したのだ。ジヨルフは慌てて剣を立てて防御の構えに入つた。しかし大力ワウソは鋭く飛び出して頭突きしてきたのだ。

「あたっ……！」ジヨルフはそれに弾かれて体勢を崩した。それでも慌てて身構えようとすると大力ワウソは身体を捻つて尾を伸ばしてきた。ジヨルフはその尾に足元を払われるようにして水溜りに倒れたのだ。

「シユルルウ……シユルルウル……」大力ワウソは喉をな鳴らしながら鋭い牙を見せた。ジヨルフは水中から顔を出したのだが、その右手からは剣が滑り落ちていた。

「やべえ……しくじつた……」ジヨルフは水溜りの中で手を伸ばした。すると間もなく洞窟の中に青い光が飛び散つて魔物の身体が曲がったのだ。ジヨルフが身体を起こすとあちらには拳を突き出したヒヤルクドの姿があつた。

「おいおい、魔物胎児の専門化が何しよつとや？」ヒヤルクドがそ

う言つてニヤリとするとジヨルフも思わず苦笑いした。そしてそこにあつた剣に氣付いてとつさに立ち上がったのだ。

「おおおおおっ！」ジヨルフは剣を手を取つて跳び上がった。するとその剣先は見事に魔物の喉元を撃つたのだ。大力ワウソはそれに怒つたようにして身体を震わせた。そしてまたジヨルフに襲いかかったのだが、ジヨルフも水溜りを蹴るようにして立ち向かった。ヒヤルクドに目をやると彼が再び青い閃光を放つ構えに入つてるのが見えた。

「おおっ……！ 危ねえつてっ……！」ジヨルフは慌てて身を屈めた。すると青い閃光を顔面に食らつた大力ワウソが悶絶するようにして水溜りに倒れた。ジヨルフはそれから身を交わしながらあちらで構えてるヒヤルクドに文句を言つた。するとヒヤルクドは狙いが外れたと首を捻つていた。

第7話 キャラバン

やがて洞窟は最深部へと続く下りの坂道となった。ジョルフたちがそこに入ろうとしてるとその奥から誰かの話し声らしきものが聞こえてきた。ジョルフとヒヤルクドは顔を見合わせて岩陰に身を隠した。すると間もなく坂道の下からランプを手にした数人が出てきたのだ。それは四人組であり、一人は革製の甲冑を着た男の騎士、もう一人は青い法衣と帽子の男の僧侶、残りの男女は不明であった。彼らが弾むように話しながら行ってしまうとジョルフたちはこっそりと顔を出した。

「女の子は腰に笛みたいなもんが下がってたから楽師やと思うけど、もう一人の男はよく判らんかったわ……」ジョルフは険しい顔をしてそう言った。

「何かが無事に見つかったって嬉しそうに言ったやろ。ヒカリゴケを採りに入ったような会話じゃなかったごつあるな。」ヒヤルクドも同様にそう言った。やがて一行の後姿が見えなくなると二人は粹を殺して飛び出した。そして坂道の下の最深部へと走り出すのであった。

洞窟の最深部はずいぶんと広い場所であり、壁や天井、あちこちに散らばる岩にヒカリゴケがびっしりと生えていた。それらが全体にぼんやりと光を放っているものでランプを消しても朝方のような明るさがあった。ジョルフたちはその岩陰に倒れてる人影を見つけた。それはバザルデ・ゴザルであり、すやすやと寝息を立てて熟睡していた。バザルデは小柄な男であり、ぼさぼさの髪と大きな耳とはまるでサルのようなであった。

「おいって、バザルデって……！」ジョルフたちはバザルデのことを起こそうと身体を揺すった。しかしバザルデは気持ちよさそうに眠

っついてまるで目を覚まさなかったのだ。

「これは、魔法が何かで眠らされてるみたいやわ…」ジヨルフはそういつて聖水を取り出した。そしてそれをバザルデの口の中に注いでやると彼は激しく咳込みながら目を覚ました。

「はあ？ジヨルフ？ヒヤルクドもけ？」バザルデは目をぱちぱちさせてそう言った。ジヨルフとヒヤルクドとは渋い顔をしてそんなバザルデの顔を覗き込んだ。

「なんでこんなところで寝てたつや？」ジヨルフがそう質問した。するとバザルデは頭を振ったり耳のあたりを叩いたりしてから洞窟のあちこちを見回した。

「そうやわ、さっきの四人組、その一人がヘンな笛を吹いてよ…」バザルデはその四人組の行方を捜すようにしてそう言った。ジヨルフとヒヤルクドとはそれがさっきの四人組のことであり、あの楽師らしき女が魔力を持った笛の音色でバザルデのことを眠らせたのだと悟っていた。

バザルデは父親に頼まれてヒカリゴケの採取に来ていた。その時父親は彼に魔物と遭うと危険だからと言って魔除けの鈴を託してくれた。それは彼ら鍛冶職人のように魔物と闘う力が乏しい人たちが使う道具の一つであり、教会の神官がこしらえたきちんとしたものであった。そうしてバザルデがここにまで至ってヒカリゴケの採取をしていると、そこにあの四人組がやってきたのだという。

「なんかよ、ここに鍵があるはずやとか言つてよ、オレにそれを知らんかっていつてきてよ…」バザルデがいうに、その騎士たちは何やら黒い表紙の古い書物のようなものを持っていて、それを突き出して興奮したようにそのようなことを言つてたという。

「そしたらそのうちの一人がその奥に何かを見つけたつよ。あれはたしか地図土やったと思うわ。」バザルデがそういうと、ジヨルフたちは四人組のもう一人がそうだったのだと気付いた。その地図土と思われる男が洞窟の壁に触って何かを調べてるとバザルデのところに楽師と思われる女が歩み寄ってきた。そしてフルートのような

横笛で穏やかな音色を奏でるとバザルデはとたんに眠たくなってそこに倒れてしまったのだという。

「んん… 他に何か言った記憶はねえけ？」ジヨルフは難しい顔でそう言った。するとバザルデは頭を掻きながらしばらく考え込んだ。

「そん女がフルートを吹くまえによ、秘術を手にするのは自分たちのキャラバンだって、そんげなこと言ったわ…」バザルデはそういつてまた欠伸をした。ジヨルフは中腰になったまましばらく考え込んだ。そして何やら面白そうな話だと思って勢いよく立ち上がった。

「これじゃろ、そん鍵があつた場所って…」ヒヤルクドはあちらの壁際で地面を蹴りながらそう言った。ジヨルフたちがそこに行つてみると、そこには穴が掘られてあり、その中には空っぽの木箱まであつたのだ。ジヨルフはその木箱がずいぶん新しいものだつたので不思議に思っていた。そして三人はそれぞれに顔を見合わせて何か奇妙だと首を傾げていた。

バザルデはジヨルフたちが来てくれたのがよっぽど嬉しかったのか、帰り道はずっとはしゃぐように喋っていた。その姿はまるで少年であり、彼が鍛冶職人として仕事を始めてることが不思議なくらいであつた。

「ジヨルフが封魔師でヒヤルクドが占星術師って、なんか不思議やわあ、魔物退治とか依頼せんといかんやろねえ…」バザルデは頭の後ろで手を組みながらそのようなことを言っていた。

「いや、オレはたぶんノベルオックには残らんと思うよ…」ジヨルフが振返つてそう言った。

「オレもそうよ、今月月末には旅立つ予定にしてるかいよ…」ヒヤルクドも続いてそう言った。するとバザルデはぼかんとしたまま二人の顔を見ていた。

「そ、そうやつちゃ、どつか他所で就職するとやね…」バザルデはひどくがっかりしたようにしてそう言った。そして彼が自分を納得

させるように腰を叩くとベルトに下げていた魔除けの鈴が足下に落ちた。それが坂道をころころと転がった瞬間、暗闇の中で魔物の目が光った。ジヨルフはそれに気付いて素早く剣を抜いていた。

やがて三人が洞窟の外に出るとそこにバザルデのリュックが落ちていた。バザルデは慌ててその中身を調べたが何かが盗られた形跡はなく、おそらくはさっきの四人組の誰かが悪戯で持ち出したのだろうという話になった。

「あ、ヤンベルたちやねえけ？」ジヨルフが土手の上を指差してそう言った。すると暗闇の中にいたヤンベルとピノとが土手の草の上を滑るようにして下りてきたのだ。

「おう、バザルデはちゃんと洞窟の中におったがよ。さっきの賭けはオレらの勝ちでいいがね？」ヒヤルクドはそう言って掌を差出すようにした。

「何言よつとけ、もう支払って来たって……」ヤンベルは苦笑いしてそう言った。それから彼らはしばらくそこにたたずんで洞窟の中のあれこれについて話した。ヤンベルもピノも少しばかり呆れたようにしてその話を聞いていた。

「あんよ、オレらもキャラバンを組んでどっかに冒険しに行かんけ？」ジヨルフがにたにたしながらそう言った。瞬間、ヤンベルもピノもさらに呆れたような顔をした。

「封魔師に占星術師、あと狩人と鉱山士じゃろ、いい組合せやと思うぞ！」ジヨルフはついに声を弾ませてそう言った。それに対してヒヤルクドは面白そうだと手を叩いていた。しかしヤンベルもピノも面倒だといって首を振っていた。

「冒険がしてえとやったらよ、修行者の塔とかに域内よ。オレは行かんけどね。」ヤンベルはそう言っただけでさっさとかえってしまおうとした。

「だってさっきの四人組もオレらと同じくらいの歳っていうか、たぶん天職を授かったばかりの人たちやったよ。職歴を上げるために

も冒険とかしとこうや。」「ジョルフはそう言つてヤンベルに続いて立ち去ろうとする。ピノの袖を掴んだ。ピノは渋い顔をして立ち止まると、ジョルフは彼の腕をさらに強く引っぱった。ピノは体勢を崩しながらジョルフの腹を殴るような真似をした。

「いいがね、武器の修理とかオレがしてやっかいよ、いつでも作業場に顔出してくんないよ！」バザルデもすっかり面白がつて跳ねるようであつた。ジョルフの捕まつたピノがどうのこうののといつて彼らの誘いを断つてゐる一方、ヤンベルはもうさつさと土手を登つていた。ヒヤルクドがそれに対して何か言つていたが、ヤンベルはとにかく面倒臭いと言つて立ち去つてしまつた。

第8話 三人目

実際のところ、ジヨルフは天職者となつて学校を卒業したといつても退屈であつた。彼は教会勤務が希望であり、そこからの求人が出て学校から連絡が車ではまるで身動きが取れなかつたのだ。だからジヨルフは仲間たちと冒険でもして力試しをするのが最良だと考えていたのだ。

昼下がり、ジヨルフはふらふらと街に出てみた。そして大門前広場から東通商店街に入るとやがて一軒のパン屋へと差掛かつた。そこはトルザック・タイガーシャークの実家であり、焼立てのパンのいい香りが表にまで漂つていた。ジヨルフがその香りに誘われるようにして歩いてるとその店先に恰幅のいい女性がいて彼のことを呼び止めたのだ。

「あらジヨルフくん、タベは楽しかつたね？」その恰幅のいい女はトルザックの母親であるサマオサであり、箒を片手にずんとして立っていた。それに対してジヨルフは後ろ頭を掻きながらみんな久しぶりに集まつて楽しかつたと話した。

「あの…ところでトルザックくんはまだ帰つてないのですか？」ジヨルフはそう切出した。するとサマオサは頬を膨らませて険しい顔になつた。

「それがね、あの子はいきなり友達を連れて帰つてきてすぐに出てつたつよ。そしたら昨日の夕方、採るザックをたずねてまた違う女の子がやってきてね。」サマオサはすっかり怒つたようにそう言つた。

「はは…そうツスカ…」ジヨルフは苦笑いしてまた後ろ頭を掻いた。そしてそういえばパンを買いに来たのだと言つて店の中に入つた。ジヨルフは棚に並んだ様々のパンを眺めながら大きく息を吐いた。そしてトルザックをたずねてきた女の子とはいつたい誰なのだ

ろうかと、彼には恋人がいるのだろうかと考えていた。

それからジヨルフが焼立てのパンの入った紙袋を下げて歩いてるとあちらの角に見覚えのある後姿を見つけた。ジヨルフはニヤリとしてそつとその後姿に歩み寄ってみた。

「何をやってるんだね！」ジヨルフはわざと声を低くしてそう言った。するとその男はひどく驚いたようにして腰を抜かしたのだ。

「だあつ… なんけ、ジヨルフけえ…」それはピノであり、彼はとにかく険しい顔をしてジヨルフのことを見上げていた。ジヨルフがいったい何をやってるんだと質問するとピノは怪訝な顔をして目をそらした。ジヨルフがそれを面白がつてしつこく問い詰めてると、そこの靴屋の扉が開いて店主と思われる老人が顔を出した。

「こりやつ！また来るとかつ！毎日毎日っ！」店主がそう言つて細い拳を振上げるとピノは転がるようにして逃げ去ってしまった。

ジヨルフがいったい何事かと驚いてると店主は彼に対しても厳しく言つたのだ。ジヨルフは店主に対して唇を尖らせながらそこから立ち去った。ヒヤルクドがいうに、一晚ゆつくりと休んだので術式を使う力が十分になったという。

やがてジヨルフが自宅に帰ってパンを食べてるとそこにヒヤルクドが訪ねて来た。彼は二階のジヨルフの部屋に上がって来るとお待たせとばかりに水晶玉を出してみせたのだ。

「さて、トルザックはいったい何処で何やってるかやけどね…」ヒヤルクドはニヤニヤしながら星のコンパスを行った。すると間もなくそれに何処かの景色が映し出されたのだ。

「おおつと、修行者の塔じゃねえけ…」ジヨルフはそう言つて手を叩いた。するとヒヤルクドもそうだと言つてうんうんと頷いた。水晶玉に映っていたのはノベルオックで生まれ育ったものであれば誰でも知っている有名な場所であり、彼らが一度は行ってみたいと思つた場所であつた。

修行者の塔とはノベルオック市街地を一望できる丘の上に建つ石

造りの塔であつた。そこはノベルオックが生んだ高僧にして世界的に有名な詩人であるオダイツサが建てたとされる塔であり、その周辺の公園は市民の憩いの場となっていた。塔そのものはオダイツサの意向によつて若者たちが力試しのために利用する場として開放されており、現在ではノベルオック州の行政が管理する施設となっていた。

「なんかよ、トルザックは友達を連れてたつて話やつたしよ、絶対あそこで修行しよるとやが。」ジョルフは跳ねるようにしてそう言った。

「ヤンベルは難しいとして、ピノを誘つたらいいこつせんや?」ヒヤルクドは立ち止まってそう言った。

「ああ、そうそう……」しかしジョルフは首を捻つてピノのさっきの奇妙な行動について話してみた。するとヒヤルクドも笑いながら首を捻つていた。それから彼らは市街地を北に抜けた位置にあるイマルマの丘へと向かうのであつた。

修行者の塔はその周辺の敷地を高い塀が取り巻いていた。ジョルフたちがそれに沿つて歩くとやがて入口である小さな門が見えて来た。ジョルフたちがそこに行つてみると監視係と思われる中年の男の姿が見えた。しかし監視係は塔に入りたいのであれば三人以上のキャラバンでないと許可が出せないと言つてあしらつたのだ。

「やっぱヤンベルかピノを誘えばよかつたかもな……」ヒヤルクドは渋い顔でそう言った。

「しょうがねえ、ピノを探しに行くかな……」ジョルフもそう言つて渋い顔をした。そうやって彼らが引き返してるとやがて木立の向こうから誰かが飛び出してきたのだ。

「あの、すみません、もしかして塔に入る仲間を探してらっしゃるんじゃないですか?」そう言つて呼びかけて来たのは若い女であつた。ジョルフたちは彼女の身形を見てすぐにそれが僧侶だと判つた。彼女は全体に青色の法衣と帽子であり、それぞれに金色の十字架の

刺繍が施されてあつた。さらにはその右手には櫛で作られた十字架が握られており、彼女はそれを杖のように携えていた。そのすべてが僧侶となつたばかりの初心者身形だったのだ。しかも彼女は黒髪で美しい顔立ちであり、ジョルフはその容姿にすっかり見惚れていた。

「私は僧侶のルラフェンと申します。この塔で力試しをしたいと思つていたのですが、友人とはぐれてしまいました……」彼女がそういうとジョルフとヒヤルクドは顔を見合せた。そして僧侶が仲間になつてくれたら心強いと言つてそれを了承したのだ。

「オレたちも友達とはぐれたみたいなものじゃし、ちょうどいいかもよ！」ジョルフはそう言つてルラフェンに歩み寄つた。するとルラフェンは嬉しそうに微笑んで右手を差出した。ジョルフもそれに応えるようにして右手を差出した。

それから三人が門に戻ると管理係の男は入場手続きをするようにと言つて申請書を差出した。ジョルフたちはそこに名前や天職などを書き込んで提出した。すると管理係の男は眼鏡をかけながらそれを確認して渋い顔をした。

「職歴は分らんですかね？」男は申請書のそこを鉛筆の先で指しながらそう言つた。

「まだ鑑定してもらつたことないんすよ、ダメですかね？」ジョルフは少し憚然とした顔でそう返した。すると管理係はそれでも問題はないと言つて申請書に署名してそれを受理した。ジョルフの目にはその仕事ぶりがどうにも適当にやつてるようにしか見えなかった。「あのオッサン、行政の役人やろ、高い給料もらつてるくせに、ちやんと仕事しろつてのよ……」ジョルフは唇を曲げながらそう言つた。「役人なんてそんげなもんよ。賢者になつてもまるでその力を活かせてない。役人の数を減らさないと税金の無駄なことやが。」ヒヤルクドも渋い顔でそう言つた。そして二人そろつて振向いてみると、門柱の中にある個室の窓辺で鼻をほじりながら欠伸をしている管理係の姿が見えた。

塔は円錐に近い形状のものが二つ並んでおり、全体に大きな石を積み重ねたような造りであった。入口はその西側の塔にあり、大きな扉はすでに開け放たれてあった。三人はそこらに吹く春風に髪を揺らしながら塔の全体を見上げていた。

「ルラフェンちゃんの友達って、それって一人じゃねえとよね？」
ヒヤルクドがそう切り出した。すると彼女は唇を固く結ぶようにしてまた塔を見上げた。

「トルザックという騎士なんですけど、先にここに入ってるみたいで……」
るらファンがそう言うとヒヤルクドはニタツと笑ってそして彼が目を転じるとジョルフがひどく驚いたような顔をして立っていた。

「あ、ああ、じゃあさ、東通のパン屋さんに行ったりしたけ？」
ジョルフがそう言うところらふえんは振向いて頷いた。ジョルフはがっかりしたようにして何度も頷いた。そして彼女がトルザックの恋人であると確信し、それがあまりに可愛いもので少し腹だし区思っていた。

第9話 修行者の塔

塔の中に入ると円形の床と天井、それにいくつかの太い支柱と石段とが目に入った。壁の高い位置には明り取りのための窓もあって全体を明るくしていた。三人はとりあえず上階に行こうと大きな石段へと向かった。するとジヨルフがそれに気付いて立ち止まったのだ。彼は魔物の気配があると言って剣に手をやった。すると彼らの周りにいくつかの影が飛び出してゆらゆらと揺れながら姿を現した。「はあ？なんけこれ？」ヒヤルクドはそこに現れた奇妙な姿の魔物どもの姿を見て思わず噴き出しそうになった。

「ヘチマの兵士って化身系の一種よ。とにかく好戦的やから気をつけない。」ジヨルフはそう言って剣を抜いた。それらは大きなヘチマの身体に蔓のような手足がある魔物であり、小さくて丸い目とペろりと舌を出した表情は愛くるしくもあつた。しかしそれぞれの手には槍の槍を持っており、それを突き出すようにして身構えていたのだ。

「うひょひょひょおおっ！」ヘチマの兵士どもは奇声を発しながら次々に襲いかかって来た。それに対してジヨルフは鉄の剣を振り、ヒヤルクドは間合いを取りながら青い閃光を放った。さらにルラフエンも櫂の十字架をぶんと突き出してそれらと対峙した。

「あぐいあ……！」その戦闘中、ジヨルフは石段に足を滑らせて転倒してしまった。彼は右足を捻ってしまってそのまま座り込んでしまった。すると魔物の一匹がそれを狙って槍を突き出してきたのだ。「うひょあひょおお……！」しかしそれはヒヤルクドの放った青い閃光に弾かれて引っくり返ってしまった。ジヨルフはそれを見計らって片足で跳ねた。そして魔物に対して留めの一撃を打ち込んでやったのだ。

しかしジヨルフは右の足首を痛めてしまつて歩くのもままならな

いほどであった。彼が荷袋から薬草水が湿布でも取り出そうとしているとそこにルラフェンがやって来た。そしてそこで腰を下ろすとジヨルフにじつとしてるようになると言って目を閉じた。

「イエル・イエル・イエルテ……」彼女は呪文を唱えて掌を合わせた。そして祈りを捧げるようにするとその掌の中から緑色の光の粒が溢れ出したのだ。彼女がそれをジヨルフの足首に当てるとその痛みも腫れも消え去ってしまったのだ。それは僧侶が得意とする回復呪文であり、ジヨルフは嬉しそうにしてびよんびよんと跳ねてみせた。

「この程度の負傷でしたら私でもどうにかかります。もちろん、骨が折れたとか気絶したとかは無理ですけどね。」ルラフェンはそう言って笑った。そして聖水や薬草などはいざというときまで取っておいたほうがいいとも言ったのだ。

「さすが僧侶、神様に仕える身だけあって心強いわ！」ジヨルフはそう言ってまた跳ねてみせた。そして彼女の助言に従い、持参した薬草などは大事にとっておこうと話合ったのだ。

塔を二階三階と上がるとさらに様々の魔物が現れた。ピクシーとは小さな鬼の類であり、人間の幼児のような体格で何匹かの群れとなって襲いかかってきた。それらは顔も身体も真っ赤であり、頭の方には小さな角まであった。ピクシーどもは鋭い声を発しながら忙しなく走り回って噛みついたり頭突きしてきたりと大暴れした。その石頭に頭突きされたヒヤルクドはあまりの痛さに悶絶して転がっていた。

サンドラーとは古びた砂袋が化けた魔物であった。それはこちらを見てニヤニヤと笑っていて動きは鈍かった。しかしこちらが先を急ごうとするといきなり跳ねたり重たい身体で体当たりしてきたりに行く手を阻もうとした。さらには怒ると大きな口から砂煙を吐き出してこちらの視界をさえぎったのだ。ルラフェンがそれに咳込んで蹲っているとサンドラーはそれを狙って体当たりしてきた。

そして彼らが三階の回廊に出ようとすると列柱の向こうからいくつもの影が素早く動いて出て来た。窓から差込む陽光に銀鱗を光らせるようにして出て来たのは大きなマスのような姿の魔物であった。それらはまるで空中を泳ぐようにしてそこらを飛び交ってジヨルフたちに襲いかかってきた。

「さすらいフィッシュだ、呪文を使うぞ……！」ジヨルフはそう言いながら飛び出した。そして彼が剣先を鋭く振下ろすとその鱗がキラキラと飛び散った。しかし魔物は床面で身体を弾ませるとすぐに体勢を整えて突進してきたのだ。

「動きが速いし……力も強いっ……！」ヒヤルクドも杓の棒を振り回してそれらと格闘した。そして彼が間合いを取って指輪のある拳を突き出すと、それよりも先に魔物が身体を震わせた。

「メテガ・メテガ・メテガ……！」さすらいフィッシュが呪文を唱えるとそこから冷気の刃のようなものが打ち出された。それは冷気呪文であり、ヒヤルクドはあまりの冷たさと痛さに身を振って転がった。

「痛ちちち……ちょっと、ルラフェン……」ヒヤルクドは呪文に打たれた右の太腿を摩りながら助けを求めた。しかしルラフェンはあちらで魔物に追い詰められていてそれどころではない様子であった。ヒヤルクドは仕方ないと思って自分の荷袋に手を伸ばした。

「ジヨルフのヤツ、何しよつとや？」ヒヤルクドはそう呟いた。彼が目を見るとジヨルフは剣を構えたままじっと目を閉じていた。それと対峙するさすらいフィッシュもいったい何事かと様子を伺っている様であった。

「ふう…… やっぱダメか、まだ技が使える状況じゃねえか……」ジヨルフは諦めたようにそう呟いた。そして大きく息を吐いてそこにいたさすらいフィッシュに対して激しく斬りつけたのだ。さすらいフィッシュは身体を捻って身を交わそうとしたが、さらにジヨルフが一撃を打ち込むといに力尽きて床に落ちたのだ。ジヨルフは大きく息を吐いて背筋を伸ばした。そして額から噴き出した汗を拭っ

て仲間たちに目をやった。

三人が西側と東側とを繋ぐ回廊に差掛かるとあちらから別のキャラバンがやってくるのが見えた。ジョルフたちが見ているとそのうちの一人が声をかけてきた。それはジョルフたちがよく知った面々であり、彼らも驚いたようにて手を振ったのだ。

「おお、ジョルフとヒヤルクドじゃねえけ、久しぶりい！」そう言ったのはマヤンタという巨漢の男であった。彼は全身に革製の甲冑を身にまとい、右手には鉄の槍があった。彼は騎士であり、ジョルフたちと中等学校のころの同級生の一人であった。

「マヤンタも久しぶりやねえ、それにシコルノスもお……」ジョルフはそう言っただけでマヤンタの後ろにいた男にも目をやった。そのシコルノスという男もやはり同級生の一人であり、大きな荷物を背負った格好は商人そのものであった。

「そうそう、トルザックには会わなかったけ？」ジョルフはそう質問した。トルザックとマヤンタとは同じ騎士道学校に通った仲であり、ジョルフはそれを思い出してそう質問したのだ。するとマヤンタはそれを知らなかったといった様子で驚いていた。

「いや、見かけてねえよ。さっきアツテムトたちのキャラバンとはすれ違ったけど。」マヤンタはそう言っただけで丸くて大きな顎を掻いた。

「そっか……あのアホ、どこにおつとやろかねえ……」ジョルフはそう言いながら後ろのルラフェンに目をやった。するとルラフェンは大丈夫だといった感じで微笑んでみせた。

「じゃあ、どっかで見かけたらジョルフたちが探しよったって言うとかわ……」マヤンタはそう言っただけでジョルフの肩を叩いた。そして彼らがそれぞれに声をかけながら立ち去ろうとする中、ジョルフはその後ろのシコルノスに目をやった。するとシコルノスは舌打ちでもしながら行ってしまったのだ。

東側の塔に入ったジョルフは振り返ってマヤンタたちの行った先を

眺めた。そしてさっきのシコルノスの態度に首を傾げたのだ。

「ジョルフが虐めたかいじゃが。シコルノスって意外と根に持つ感じやったやろ…」ヒヤルクドは苦笑いしてそう言った。

「オレは虐めたことなんてねえぞ。あれが一人でふらふらしてたのを遊んでやったり、苛めたことなんてねえぞ。」ジョルフは怪訝な顔をしてそう言った。しかしヒヤルクドは、自分がそのつもりがなくても相手にそう取られたらそういうことになるのだと言って笑った。

「あの… トルザツクはどんな感じだったんですか？」ルラフェンがふいにそう言った。ジョルフとヒヤルクドとが驚いたように振向くと、ルラフェンは照れたようにして笑っていた。ジョルフたちもそれに合わせて笑った。そして子供のころからのトルザツクのことについてずいぶんとおもしろおかしく話してやったのだ。

第10話 扉を開ける方法

マヤンタたちのキャラバンは西側の塔に戻って一階にまで下りていた。しかしそこにも何も目新しいものがないということで休憩のために座り込んでいた。

「じゃあバターパンと暖かいミルクとで一息つくけ…」シコルノスはそう言っただけで、大きな荷物を下ろした。それは商人たちが愛用する不思議な荷袋であり、そこからは大きな木箱が出て来た。シコルノスはニコニコと微笑みながらそれらを出して仲間たちに振舞ったのだ。

「やっぱ商人が仲間におって助かるわ。戦闘ではまったく役に立たんけどね。」マヤンタはバターパンを頬張りながらそう言った。

「まあ、オレたち商人は経験を積んで職歴を上げればこの荷袋にゾウでもクジラでも入れて運べるようになるかいね。」シコルノスは得意げな顔でそう言った。するとマヤンタはそれに驚いた様子でパンを噴出していた。

「あれ、どんげしたとメルキド？」マヤンタはそう言った、メルキドとは彼らの仲間の一人であり、毛皮の衣服と背中の中矢とは狩人の身形であった。彼女はパンもミルクも口にせず、に陰しい顔をして天井を見上げていた。

「さっきの三人、あつちの天辺に行ったのだろうか…」メルキドはそう言った。その口調は彼女のいつもの穏やかなものとは違って、マヤンタもシコルノスも顔を見合わせていた。

「さっきの三人が言っただけで、トルザックという騎士、本当はどこにいるのだろうか…」メルキドはそう言っただけで、マヤンタたちに目をやった。その視線は鋭く、それまでの彼女のものとは違っていた。

「メルキド、ちょっとどんげしたとね…」心配そうにそう言った

のはもう一人の仲間であるオルフィーであった。羊飼である彼はメルキドに誘われてこれに参加した立場であり、他の二人よりも心配してるようであった。

「私たちは東側の塔までずっと廻ってきたけどそのトルザックという騎士とは遭わなかった。だとしたら、考えられるのはあの扉の先、塔の天辺じゃないかね。」メルキドはそう言っただけで二ヤリとした。しかしマヤンタたちは彼女の声色が違うことについて気付いたのだ。

「お、おい、メルキドじゃないやろ…？」オルフィーがそう言っただけで立ち上がった。そして彼が詰寄った瞬間、メルキドはそれをひらりと交わして彼らから離れた。

「もうあんたらには飽きた。ここから先は一人で行くわ。」メルキドはそういうと革の帽子を取った。そさらに胸元のベストに手をやるとそれらの衣服を脱ぎ捨てたのだ。その手際は鮮やかであり、マヤンタたちは仰天して見守るばかりであった。

「お、おお… 盗賊か…？」マヤンタは目を丸くしてそう言った。それまで彼らが友人のメルキドだと思っていたのは見知らぬ女の盗賊だったのだ。

「私も盗賊になったばかりの身でね、ここで修行がしてみたかったのよ。そんじゃ、悪く思わないでね。」女の盗賊はそう言って不敵に笑った。そして手を振りながらさっさと走り去ってしまったのだ。「ていうか… 可愛かったこっせん？」マヤンタは目を丸くしたままあそう言っただけで。彼が振向くとシコルノスも激しく頷いていた。彼らはそのまま彼女が行ってしまった先を眺めていた。しかしオルフィーだけは動揺したままであり、だったらメルキド本人はどこにいるのだろうかと思ひていた。

東側の塔に入ると四階に上がる階段があり、そこから再び西側へと向かう回廊があった。しかしその手前には大きな石の扉があつて、ジヨルフたちの行く手を阻んだのだ。その扉には十字を円で囲んだような模様があり、それぞれの頂点には四つの星印が刻まれてあつ

た。

「ぬがっ… ぜんぜん動かんわあ…」 ジョルフは扉を全身で押すようにしてそう言った。するとヒヤルクドがその扉の傍らにあった石碑らしきものを指差して苦笑いした。

「ダメやわ、こっから先は四人組のキャラバンじゃねえと進めんみたいやわ…」 ヒヤルクドは石碑に搔かれてある文章を指先でなぞるようにしてそう言った。ジョルフたちがそれを見ると、たしかにその石の扉は四人組でないとあけられないと書いてあった。

「どんげする？ 誰か予備に行くけ？」 ジョルフは扉を脚で押しながらそう言った。そして彼が目を転じると、るらふえんが唇を結んで扉を見つめている姿があった。

「おそらくトルザックは仲間が三人はおつて、それでここから先に行つたはずやが。」 ヒヤルクドがそう言った。そしてマヤンタかシコルノス、あるいは街に帰ってヤンベルでもつれてこようかと言つた

「だったら、ここで待つてればトルザックが出てくるかも知れないし、私が一人でとどまってもいいけど…」 ルラフェンが思い切つたようにそう言った。するとその時であつた。彼らの背後に足音が現れて誰かが立ち止まつたのだ。一同が振向くとそこには黒い革製の衣服を着た見知らぬ女が立っていた。ジョルフは彼女の鋭い表情や肩まで伸びた灰色の髪、あるいは黒い衣服の下に隠された身体に目をやって息を呑んでいた。

彼女は自分が盗賊であり、さつきまでマヤンタたちと一緒にだつた狩人に返送していたのだと言つて口元を緩めた。それには一同すっかり驚いた様子であり、いったい何事かと身構えていた。

「ははは、怖がることないわよ。私だつてあんたたちと同じで盗賊になつたばかり、修行中の身よ。」 彼女はそう言いながらつかつかと歩み寄つてきた。そして扉の傍らにあった石碑に手をやった。

「私たちもさつきこまで来たのよ。でも、あのシコルノスとかいう商人が面倒だの時間がないだのとうだう言い出したもんで引き返したわけ。あのマヤンタという騎士もお人好しだからそれを承知

しちゃってね。つまらない人たちだったわ。」盗賊はそう言いながら三人の顔を見た。瞬間、ジョルフは彼女の表情に胸をドキドキさせていた。

「ここから先に行くつもりだったら、私がキャラバンに入ってあげるわよ。そのあなた、愛しの彼に会いたいでしょ？」盗賊はからかうようにそう言っただけで、ジョルフの顔を指差した。それに対してルラフェンは怪訝な顔をして盗賊のことを睨み返した。

「おお！それはいいわ！」ジョルフがそう言っただけで盗賊のまえに飛び出した。

「オレは封魔師のジョルフ・アバーナシー、君は？」ジョルフはそう言っただけで右手を差出した。すると盗賊はひどく驚いたような顔をしてみただけでジョルフの右手を払った。

「はあ？盗賊に名前を聞いてどうするつもり？」彼女は苦笑いして少し後退りした。するとジョルフは仲間になるのだから名前くらい知っておくべきだといって笑った。ジョルフと盗賊とがそうやって言い合ってる仲、ルラフェンはこそそと歩いてヒヤルクドの背後に回った。

「あの、ジョルフさんっていつもあんな調子なの？」ルラフェンは声を潜めてそう言った。するとヒヤルクドは苦笑いして、ジョルフの行動力や積極性はほかの誰にも真似できないものだと言った。ルラフェンは鼻息を噴いた。そして少し残念そうにしてジョルフのことを見ていた。

結局、盗賊は諦めたようにして自分がコナンベリーという名前だと言った。ジョルフもそれで納得した様子であり、改めて右手を差し出して握手を求めた。それに対してコナンベリーは渋々と革手袋をはずしてそれに応じたのだ。

「さあ、だったらさっさと行くわよ！」コナンベリーはそう言っただけでジョルフの右手を払った。そして彼女を中心として余人が扉のまえに立つと、それはゴロゴロと鈍い音を立てながら動いたのだ。扉の先は回廊であり、四人がそこを抜けると扉はまた閉じられてしまっ

た。

ジヨルフたちが回廊を渡つてると列柱の外から何かがゆらゆらと舞い込んで来るのが見えた。ジヨルフは剣を構えてそれらがお化けアゲハという魔物だと言った。お化けアゲハはカラスよりも大きいほどのアゲハチヨウの魔物であり、黄色と黒色の羽を広げて悠々と舞っていた。

「なんけ、チヨウチヨみたいやけど強いとけ？」ヒヤルクドは身構えながらそう言った。

「攻撃力は低いけどよ、あれは睡眠呪文を使うかいよ……」ジヨルフはそう言いながら後ろのコンナベリーに目をやった。しかし彼女の姿はいつの間にか消え去っていたのだ。ルラフェンもそれに気付いていた様子で険しい顔になっていた。

「キキキツ…キキツ…！」お化けアゲハは鋭い声を発しながら襲いかかってきた。それらが激しく飛び交って体当たりしてくる中、三人はそれぞれに飛び出して交戦した。それらは鱗粉を撒き散らすようにしてまた鋭い声を発した。

「ネミガ・ネミガ・ネミーガ…！」お化けアゲハの一匹が羽を振るわせて呪文を唱えた。するとそこから穏やかな波動のようなものが広がって三人の眉間のあたりを鈍く打ったのだ。その瞬間、ヒヤルクドは強烈な睡魔に襲われてふらふらと姿勢を崩した。ルラフェンもそうであり、へなへなと座り込んでついには眠り込んでしまっていた。

「んぐ…ぐおおお…！」ジヨルフはそれを承知していた様子で必死に踏ん張っていた。そして大きく息を吐き出して剣先を立てると、また目を閉じて精神を集中させたのだ。すると間もなく彼が構えた剣の刃がぼんやりと赤い光を帯びた。ジヨルフはその感覚に気付いて目を見開いた。

「よおし…来た来た来たああっ！」ジヨルフは勢いよく飛び出してその赤くなつた剣先で斬りつけた。するとそれはさらに激しく赤く

なつて火の粉を放つたのだ。それに撃たれた魔物の身体は黒い煙を吹きながら落下した。ジヨルフはそれを見ながらまた剣先を立てた。「おおあゝ たたっ……！」しかしそれを狙っていたかのように他の一匹が突っ込んできて彼の顔を弾いた。ジヨルフがそれに怯んでひっくり返ると、お化けアゲハはまた睡眠呪文を唱えた。

「んんん……ああ……！」そこでルラフェンが身震いしながら立ち上がった。彼女が合掌して大きく息を吐き出すとその前進を包んでいた睡眠呪文は消し飛んだ。呪文から開放されたルラフェンはそこに倒れてる二人とそれを狙う魔物とに目をやって唇を噛み締めた。そして胸のまえで手を合わせると目を閉じて祈りの姿勢に入つたのだ。「ラムガ・ラムガ・ラムーガ……！」ルラフェンは呪文を唱えて合わせていた掌を突き出した。するとそこから目が眩むほどの光の輪が打ち出されて魔物の一匹へと飛んだ。それは僧侶たちが得意とする光輪呪文であり、それに撃たれた魔物の身体は砕けるようにして落下した。

「はあああ、上手くいった……」ルラフェンはそれを見届けながらさらに呪文を唱えた。そしてもう一匹を仕留めるとついに息を切らして座り込んでしまった。そうやって彼女が魔物どもを仕留めてしまふとヒヤルクドもジヨルフも睡眠から開放されて目を覚ました。

ヒヤルクドが持参していたチョコレートを差出すとルラフェンはそれを喜んで口にした。すると彼女は苦笑いして、もう体力的にあればこの魔法を使う余裕はないと言つたのだ。ヒヤルクドはそれに納得したように頭を掻いていた。

「ところであの盗賊の彼女は？」ルラフェンはそう言いながらあちこちを見回した。するとあちらの柱の陰から彼女が姿を現したのだ。ルラフェンはそれを見ながら険しい顔をした。ジヨルフもそれに気付いた様子でゆっくりと立ち上がっていた。

「同じキヤラバンなんだから、一緒に闘ったらどうなの？」ルラフェンは勢いよく立ち上がってそう言った。そしてジヨルフのことを押し退けるようにしてコナンベリーに歩み寄つたのだ。しかしコナ

ンベリーはまるで動じた様子もなくほくそ笑んでいた。

「何言ってるのよ。あんたを襲った一匹は私が投げたナイフが致命傷になったんじゃない。」コナンベリーはそう言って手元にあった三本ほどの手投げ用のナイフを見せてやった。そしてそうやって姿を隠しながら先頭に参加するのが自分たち盗賊の戦術なのだと言つてまた笑つたのだ。それにはルラフェンもジョルフたちも驚いた様子で黙っていた。

「この先に階段があつてすぐに天辺みたいよ。足跡の感じからそてまだ四人くらいが居るみたいだけど。」コナンベリーはそう言いながらくると身体を回した。瞬間、ルラフェンの表情が綻んだ。そしてジョルフが肩を叩いてやると、彼女もそれに合わせて歩き出した。コナンベリーが導く先にはたしかに階段があり、そこから見上げると塔の上の青空まで臨めた。それを見たルラフェンの心は弾むようであり、先を歩くコナンベリーの背中を見て少し申し訳ない気分になっていた。

第11話 塔の天辺

塔の天辺は意外に広い場所であつた。そこは西と東の塔の頂が繋がつたような形であり、その南側にはこの塔を築いたオダイツサの石像が立っていた。全体に夕陽が傾いて眩しい中、ジョルフたちはその石像の方から何人かが歩いてくる姿を見つけた。そのうちの一人は甲冑を身に着けた騎士であり、それもジョルフたちに気付いて立ち止まつた。

「はあ？ジョルフ？ヒヤルクド？ルラフェンもなんでや？」それはトルザックであり、仰天したようにしてそう言つた。そして仲間と思われる三人を置いてこちらに掻けてきたのだ。

トルザックは被つていた革の兜を取つてぼさぼさの長髪を現した。そして太い眉と鋭い眼光とで久しぶりに会う友人であつたりなぜかその友人たちと同行している恋人であつたりに歩み寄つた。トルザックは彼らの肩を叩いたり手を握つたりしながらいったい何をするのだと質問した。

「いや、あんたがここに入つたつて話やつたかいよ……」ジョルフはニヤニヤしながら昨晚からのあれこれについて話し始めた。しかし嬉しそうに彼がそうしてるのに対し、トルザックの表情は空ろであつた。彼はジョルフたちの後ろにいるルラフェンと目を合わせられずにきよるきよるとしていたのだ。

「そうかそうか、それでルラフェンとたまたま下で出会つて、そうかそうか……」トルザックは後ろ頭を掻きながらそう言つた。しかし彼がそうやって朗らかなのに対し、ルラフェンの表情は鋭いままであつた。

「そうそう、下でマヤンタたちとも会つたわ。そこにいる彼女はそのマヤンタたちの仲間やつた人だよ。」ヒヤルクドがそう言いながら後ろのコナンベリーに目をやつた。コナンベリーは我関せずといった様子で少し離れて立っていた。

「ああ、じゃったらオレも仲間を紹介すつわ…」トルザックはそう言って遠巻きに見ていた三人のことを手招きした。そのうちの一人、ミントスという釣り師が可愛い女だったものでルラフェンの表情がさらに厳しくなっていた。

「あの、誤解があるといけないのですが、僕がトルザックと一緒に行こうと誘ったんですよ…」そう言いながら踏み出したのは羊飼いのコーミズであった。彼がいうに、もともとは彼とミントスともう一人のポルガトの三人で冒険に出ようとしてたのだがどうにも心持たないということで騎士であるトルザックに声をかけたのだという。「おかげで塔の天辺にまで来れたし、面白い話も聞けたし、ね！」ミントスがそう言ってコーミズの顔を見た。するとコーミズも彼女の顔を見てやさしく微笑んだ。彼らがそういう関係であることはそこにいた誰もがすぐに承知していた。

「そ、そういうことやかいよ、心配ねえって、ルラフェンちゃん…」トルザックはまた頭を掻きながらそう言った。するとルラフェンは目を閉じて大きく息を吐いた。

「そうね、浮気のことバレてしまっただけで逃げ回ってるにはよく出来た話ね…」ルラフェンはつぶやくようにそう言った。その言葉は鋭い刃のようであり、トルザックの装備している革の甲冑を貫くようであった。そのやりとりにジョルフたちも苦笑いするばかりであった。

「ねえ、あんたがさっき言ってた面白い話って何なの？」いきなりそう言って彼らの間に入ってきたのはコナンベリーであった。彼女が話寄るとミントスはひどく驚いたようにして仰け反った。するとコナンベリーは鋭い目をしてあちらの石像の足元を指差したのだ。ジョルフたちがそちらに目をやると、そこにはもう一人の誰かの人影が立っていた。

その人影は夕陽をいっぱいに浴びながらゆっくりと歩み寄ってきた。初めは全体に眩しくてその全貌が見えなかったが、やがてその歩き

方や手にした杖などからそれが老婆であることが判った。しかしジヨルフたちはどうしてこのような場所に老婆が一人でいるのかが不思議でならなかった。

「あの人がこれをくれたつよ……」トルザツクはそう言つて荷袋の中から一冊の書物を取り出した。それは黒い表紙のずいぶんと古そうな書物であり、背表紙などには鍵を模つたような金色の紋章が見えた。それを目にした瞬間、ジヨルフは洞窟で見かけた四人組のことを思い出していた。

「ほっほっほ、また新しい四人組みが来追つたか。夕暮れまであと僅か、これが最後であろうな。」老婆は不適に笑いながらそう言つた。全体に灰色のローブを身にまとつた老婆は少し不気味であり、その表情などから魔女を連想させるほどであつた。しかしジヨルフは老婆の姿から闇の気配らしきものを感じなかつたのでそれが魔女などではないと承知していた。

「わしは三日前の夜明けからきょうの夕暮れまでここに留まつて訪れた若者たちにこれを託すのが役目なのじゃよ。」老婆がそう言つて右の掌を差出すとそこに黒い表紙の本が現れた。それはトルザツクが手にしていたものと同じものであり、老婆はさらにもう一冊を現してジヨルフとヒヤルクドとに押しつけた。ジヨルフもヒヤルクドも戸惑いながらとりあえずそれを受取つた。

「な、なんスか、これ……？」ジヨルフはそう言いながら黒い本の表紙などに目をやつた。するとそこには「冒険書」と書いてあり、同じく鍵を模つたような金色の紋章があつた。しかしジヨルフはその紋章の下にあつた小さな文字に気付いて目を丸くしたのだ。

「それはお主らのような若者たちに冒険を与えるための書物じゃ。そこに書かれてることに従つて秘密の鍵を探す。そしてそこに書かれた場所に行つて扉を開ければその方から褒美が出るというものじゃよ。」老婆はそう言つてニヤリと笑つた。その刺すような眼光に一同は黙ってしまった。

「そのある方つて……」ジヨルフがそう質問しようとする则老婆は

それをさえぎるようにして杖の頭を振ってみせた。

「その最初のページに冒険に参加するキャラバンの四人の名前を書込むようになつとるじゃろ。そこに四人分の名前を書いたら冒険の始まり、鍵探しの始まりということじゃよ。」老婆はそういうと肩を揺すって笑った。ジヨルフたちがそれに従って最初のページを見るとたしかに四人分の名前を書込むようになっていた。しかしそこから先のページは真つ白であり、それ以上は何も搔かれてなかった。「だから、誰がこれを……」ジヨルフは少し怒ったようにしてそう切出した。すると老婆はまたそれをさえぎるようにして彼の口元に杖の頭を当てたのだ。その瞬間、ジヨルフは言葉を奪われたように喋れなくなってしまった。

「ではやがて夕暮れじゃ。わしの役目ももう終わりじゃ。お主らも明るいうちに帰らんと厄介な魔物が出て来て足止めを食らうてしまふぞ。」老婆はそういつて高笑いした。一同が戸惑う中、老婆はいつの間にか姿を消していた。ヒヤルクドたちはいったい何事かと驚いて天辺のあちこちを見回した。しかしそこには夕刻の肌寒い風が吹くばかりで何もなかったのだ。

一行が塔を下りるともう日が暮れており、管理係の男も時間を過ぎていると怒っていた。管理係が時計を指差しながら厳しい顔で注意すると、ジヨルフなどはとりあえず申し訳ないと頭を下げていた。それでも管理係はこういうことが連日続いてるのだとか最近の若者はどうのとかと文句ばかり言っていた。

それから一同は老婆からもらった冒険書を見るために灯りのある場所を探した。そして公園の近くにカフェを見つけ入ってみた。しかしその場にすでにコナンベリーの姿はなくなっていた。

「じゃかいよ、ばあさんがそうやって勧めるかい名前書いたつよ。」トルザックはそう言っ自分たちの冒険書を開いてみせた。するとその初めのページにはトルザックとコーミズとミントスとポルガトの名前とそれぞれの天職とが記載されており、その次のページを開

くと鍵の在り処を示したと思われる文章が記されてあった。

「ここに四人の名前を書いたら次が出てくるみたいやつよ。とりあえずオレたちはカナズーガの沼に行けばいいごつあるわ。」トルザックはそう言いながら本を閉じた。そしてゆっくりと表紙を立ててそこにあつた表題と紋章とを向けた。

「あのばあさん、要するに王族の使いつてことやるが……」トルザックは声を潜めてそう言つて紋章の下にあつた小さな文字を指先で撫でた。そこにあつたのはそれが王族管轄のものであることを示す書名であり、それを知らなかつたるらふえんなどはひどく驚いていた。「じゃ、じゃあ、この冒険書を用意したのは王様か誰かやと?」ルラフェンは思わず声を高くしてそう言つてしまつてあわてて口を押さえた。それと同時にトルザックたちも鼻先で人差し指を立てていた。

「どうやらよ、他にも何組かがこれを受取つていてすでに動いてるみたいやわ。王族の誰かが用意した冒険なんてすぐくねえや?」トルザックはニヤニヤしてそう言つた。するとヒヤルクドは手を叩き、そつえば川沿いの洞窟でそれらしき四人組みとすれ違つたと話した。

「……あれジョルフ、何しよつとや?」ヒヤルクドはそうやってとなりのテーブルのジョルフに目をやった。

「いや、せつかくやから名前を書いてみたつよ……」ジョルフはカフェの店員に借りたというペンを指先で回しながらそう言つた。ヒヤルクドたちがそれを覗き込むと、そこにはジョルフとコナンベリーの名前が書いてあつた。

「あと二人、ピノにでも声をかけてみつかね……」ジョルフはそう言つて笑つた。ヒヤルクドはさすがに行動が早いと関心していたが、ルラフェンなどはすっかり呆れていた。

「ルラフェンはどんげすつとや?」トルザックが意を決したようにそう言つた。するとルラフェンは彼と仲違いしていたことを思い出して渋い顔をした。そしてヒヤルクドに対し、よかつたら自分の名

前も書いてくれといったのだ。ヒヤルクドは僧侶が仲間になつてくれると心強いといつてさつさと名前を書込んでいた。

みんなと別れたジヨルフは鼻歌でも歌いながら跳ねるようにして歩いていた。そうやって彼が市街地から自宅のある間やミット町に向かつて暗い木立の道を歩いてるとその行く手に黒い人影が飛び出した。ジヨルフはゆつくりと立ち止まって闇の中に目を凝らした。

「はっ……！」女の声が飛び出した瞬間、あたりに眩い光が放たれた。ジヨルフが袖口で顔を覆いながらうずくまると、それを見計らつたようにして人影が突進してきた。

「おおっと……そうはいかなくて……！」ジヨルフはそう言つてその女の手首を掴んでやった。

「うぐっ……！」それはコナンベリーであり、あわててジヨルフの手を払つた。

「やつぱりね……」それに対してジヨルフは彼女が現れるのを承知していた様子でニヤニヤしていた。コナンベリーはそれにがっかりした様子でジヨルフから目をそらしていた。

「これに名前を書いたからよ、あと二人を見つけて一緒に冒険に行こうや。そうすれば王族からのお宝も手に入ると思うぞ。」ジヨルフはそう言つて右手に持った冒険書を振つてみせた。コナンベリーはそれを睨みながら鼻息を噴いた。そして最後には苦笑いしてそれはそれで面白そうだと承知したのだ。

第12話　ピノの訪問

翌朝、ジョルフが部屋で寝てると玄関先で犬が吠える声がして目が覚めた。窓を開けて覗いてみるとそこにはピノがいてアバーナシ一家の愛犬であるドーマを相手にたわむれていた。ジョルフはちょうどよかったと思って手を叩きながらピノに声をかけた。

ピノは紙袋に入ったクッキーを土産に持って訪ねて来ていた。ジョルフはそれを美味い美味いとほおばりながらきのうのあれこれについて話した。ジョルフが修行者の塔でのこと、マヤンタたちと出会ったことや天辺にまで至るとトルザツクの一行が居たことなどをおもしろおかしく話すのに対し、ピノはどうに空ろな表情で話半分といった様子であった。

「それでよ、そんな老婆がこの書物をくれたってわけよ……」ジョルフはそうやって黒い表紙の冒険書を出してみせた。そしてその最初のページを開くとそこにピノ・ベンクという名前を書込んだのだ。

「ちよ、あんた何しよつとや……？」ピノはあわててそう言った。しかしジョルフは嬉しそうであり、そこに書かれた三人の名前を見せつけたのだ。

「コナンベリーちゃんがよ、他の二人の仲間を見つけたら自分もキヤラバンに加わるって言うかいよ、あんたも入れてやったわ。」ジョルフはさも当然のようにそう言った。しかしピノはますます渋い顔になって、勝手に名前を書かれても困ると言って鼻息を噴いた。「だいたいヒヤルクドは？ヤンベルとかもおっじゃろ？」ピノは冒険書を奪い取ろうと右手を突き出すようにしてそう言った。するとジョルフは悪戯っぽく笑ってそれを背中後ろに隠した。

「あんたも就職までにある程度までは職歴を上げておく必要があっじゃろ。だったら少しでも冒険しといったほうがいいがね。」ジョル

フはニヤニヤしながらそう言った。そしてヒヤルクドはヤンベルを誘いに行ってるはずだと話しながらピノの右の手にあるキラキラと光るものに気付いた。

「なんけ、それ、指輪ね？」ジヨルフは不思議そうにしてそう言った。指輪というものは、例えば占星術師や呪術師などのようなそうした力を扱う天職者であったり、あるいは貴族や豪商などが装飾品として身につけるものであり、鉱山士であるピノが身につけていることは極めて不思議なことだったのだ。

「じゃかいよ、じゃかい朝早くから訪ねて来たっちゃが。それなのにあんたは一人でべらべらと喋って……」ピノは険しい顔をしてそう言って右の手のそれを隠すようにした。ジヨルフはだったらそれをちゃんと見せてみると言った。ピノは大きく息を吐きながら洪々とそれを見せてやった。ピノの右の手にあるのは猫の目を模ったような指輪であった。

それからジヨルフとピノとは東通商店街へと向かった。その靴屋の角にはいると、そこから見える三日月亭というレストランに目をやった。そこからはばらく様子を見てみると靴屋の中で物音がして正面の扉が開くような気配があった。ジヨルフたちは靴屋の老店主が動き出したと思ってこそそと走り出した。そしてその裏路地に入って少し離れた位置から表通りを渡るとそのまま古道具屋の裏手に回った。そこはレストランの二軒となりであり、その裏手に回るともういい匂いがしていた。

「本当にいくつもりけえ？」ピノは声を殺すようにしてそう言った。するとジヨルフはニヤリとしてうなづいた。

「百聞は一見にしかずっていうやろ……」ジヨルフはそう言って古道具屋の裏手の狭い道をネコのように身を縮めて走った。ピノは少しためらったように鼻息を噴いた。しかしジヨルフだったらどうにかしてくれるかも知れないという期待もあってそれを追いかけたのだ。やがてジヨルフはレストランの裏手へと出た。彼はピノがあちら

の樽の後ろにピノが身を潜めてるのを確認してそこに突っ立った。そしてしばらくあちこちをきよるきよる見回しているとそこに一匹のネコがやって来た。ネコは茶色と黒色のブチであり、ジョルフの姿を見て木箱の上に座った。

「おう、おまえもケツトシーか？」ジョルフは腰を屈めてそう言った。するとブチネコは驚いたようにして逃げ去ってしまった。

「ジョルフって、あんまりうるうるしよると誰か来るって……！」樽の後ろに隠れたピノはあせったようにしてそう言った。しかしジョルフはかまわずにそこらをうるうるしていた。すると間もなくレストランの裏口が開いて誰かが出てきた。

「あ、どうも……」ジョルフはそれに対して軽く会釈した。裏口から出てきたのは白いコック服を着た若い女であり、バケツを下げてジョルフのことを見ていた。

「剣？　もしかして封魔師の方ですか？」若い女は驚いたようにしてそう言った。するとジョルフは頭を掻きながらそうそうと頷いた。「なんか魔物が出たって話でしてね、ちょっと退治を依頼されてですね……」ジョルフはそうやって適当なことを言った。すると若い女はますます驚いたようにして息を呑んだ。

「でもどうやらないかったみたいですし、新p氏じゃなくていいですよ。」ジョルフがそういうと彼女は安心したようにしてほっと息を吐いた。ジョルフはそんな彼女の肩をぽんと叩いてやってくるりと踵を返した。

ジョルフは彼女が立ち去ったのを確認すると跳ねるようにして樽のほうへと向かった。そしてピノのことをからかってやろうと胸を弾ませていたのだが、そこにいたピノはすっかり様子がおかしかったのだ。ピノはそこでネコのように身体を縮めて背中をひくひくさせていた。そしてその視線の先には赤い毛並みのネコの姿があったのだ。

「おやおや、ご友人を連れてらしたのですね……」そう言ったのは赤い毛並みのネコであった。ジョルフは驚いてピノと同じようにして

身を屈めた。すると赤毛のネコはいつの間にか二本足で立ち上がっていて人間と同じような衣服を着ていた。ピノはそれに対してあわてるような怯えてるような様子であり、ネコはそれを見下してるようにも見えた。

それはケットシーであつた。赤い毛並みのそれは路地裏のレンガに腰を下ろすと懷から煙草を出して火をつけた。ジヨルフは初めて見るそれにドキドキしながらその動きのすべてをじっと見ていた。「あなたがこの男に指輪をやったのですか？」ジヨルフは意を決したようにそう切出した。するとケットシーはニヤリとしてジヨルフの顔を見た。

「いえいえ、それはあくまでも腕輪ですよ。ヒュマにとっては指輪ほどの大きさでしょうけどね。」ケットシーはそういうと次にピノの手元に目をやった。

「このピノが、その指輪の呪いから解放してもらいたいって、そう言ってるんですけど……」ジヨルフはそう言った。するとケットシーはまたにやりとして煙草の煙をくゆらした。

「呪いなんてとんでもない。それは貴方たちヒュマがネコの姿に化けることの出来るといふ代物ですよ。」ケットシーはそう言いながら煙草の火を消した。そしてとんと立ち下がるとピノの顔のまえに立った。そしてそこにある指輪を指差して彼らの顔を見上げた。

「みなさんでいうとこの職歴でしたでしょうか。それがある程度までに達したらこの指輪の力を超えることが出来ますよ、この猫目石の指輪なんてその程度のもですよ。」ケットシーはそういつてにやりとした。するとジヨルフもそれに応えるようにしてやはりニヤリとしたのだ。しかしピノは身体を縮めたままであり、さらに渋い顔になって黙っていた。

第13話 片想い

それは数日前のことであった。ピノは鉱山士となったお祝いにと母や姉に連れられてレストランを訪れていた。そこは三日月亭であり、そこで出されるレミヤザ料理は町一番との評判であった。ピノはそこでとにかくよく喋る母親と姉とに挟まれて小さくなっていた。しかしそんな彼の意識をすべて奪ってしまうような出来事があったのだ。

「はい、こちらはマコンジョラ牛のニンニク炒めとなります。」テーブルの傍らに立ってそう言ったのは若い女であった。それはこのレストランで働く料理人の一人であり、自ら配膳しながら料理のひとつひとつを説明していた。ピノはそんな彼女の顔を見てはつと息を呑んだのだ。それは彼が中等学校のころにずっと片思いしていた同級生、ロマリアだったのだ。ロマリアはまったくそれに気付いてない様子で朗らかに接客していた。しかしピノはもう息も出来ないほどに胸を熱くしていた。そして母親と姉とは相変わらず町の噂話で盛り上がっていた。

それからピノは彼女とどうにかして接触することが出来ないだろうかと、どうにかして昔からの想いを伝えることができないだろうかと考えるようになった。しかし三日月亭はそうしたお祝いの席でしか入れないような高級な店であり、彼が一人で気軽に入れるような店ではなかったのだ。そこでピノはとりあえずレストランのある商店街をうろつくと歩き回ってみることにした。角の靴屋で立ち止まってそこからずんずんと歩いてみた。やがてレストランの手前に差し掛かると間の細い路地の向こうに人影が見えた。それは彼女であり、彼女は残飯を出したついでに野良猫とたわむれてる様子であった。ベンクはその陰影を見て鼻息を噴いた。そして彼女も自分たち

と同様に天職を授かったばかりの身であり、それでいてさつそく料理人として活躍してるのだと思つて胸を熱くしたのだ。

その日もピノはそれとなく商店街に出てうろつくと歩いていた。彼がそうやって角の靴屋のあたりに立つてると背後から声をかけるヒトがあつた。

「何をやってるんだね……！」ピノはその声にひどく驚いて振り向いた。するとそこにはジオルフが立つていてニヤニヤしていたのだ。

「だあ…… なんけ、ジオルフ……？」ピノはとにかく険しい顔をしてジオルフのことを叩いた。すると間もなく靴屋の扉が開いてその老主人が顔を出したのだ。

「こりやつ！またオマエかつ！毎日毎日……！」店主がそう言つて細い拳を振上げるとピノは転がるようにして逃げ出した。ジオルフはいつたい何事かと驚いていたが、その年老いた店主はジオルフに對してもどうのこうのと文句を言い出したのだ。

ピノは裏路地に入り込んで息も絶え絶えに座り込んでいた。彼が振向くとそこはちょうどあのレストランの裏手であり、いくつもの木箱や樽などがあつて窓辺からは美味そうな匂いのする湯気が出ていた。ピノがそれを見ながらまた慌ててるとその足元に一匹の猫がやつてきた。

「お、おう、なんけなんけ……」ピノは険しい顔をしてその猫のことを見下ろした。するとその赤毛の猫は彼のことを見上げてミャアミャアと鳴いたのだ。しかしその顔はピノのことを見て笑つてるようにも見えた。ピノはどちらかというと猫よりも犬が好きであり、そうした猫の振舞いが嫌いでもあつた。だからその赤毛の猫の笑つたような表情が気味悪くなつてさつさと逃げ出したのだ。

ピノは大門前の広場に出てそれとなくベンチに腰掛けていた。彼がそこに集まつたハトを眺めてぼんやりしていると彼に声をかけるヒトがつた。ピノが顔をあげてみるとそこにはいくつもの荷物を抱えた二人が立っていた。

「よっ！」そうやって右手を上げたのはブリート・ノアであつた。

ブリートもyはり中等学校からの友人の一人であり、大学進学に向けてあれこれの支度のため走り回ってる様子であった。ブリートの傍らにはその父親の姿もあり、買物の袋などを下げて朗らかにしていた。

「なんかみんなが集まったって話聴いたけど…」ブリートは眼鏡をくいくいと動かしながらそう言った。

「ああ、夕べね…」トルザックは来んかったけど…」ピノはそうやって適当に対応した。

「今度よ、ジオルフくんたちに言ってみんなで遊びに来ないよ。オイちゃんも美味い酒でも飲ませてやるがね。」ブリートの父親は息子よりも朗らかでよく喋った。ピノはそれに対してもそれなりに対応していた。しかし実際はそれどころではなく、レストランで働く彼女のことで頭がいっぱいだったのだ。

やがて夕刻となり、ピノが帰宅しようとしてると雨が降り出した。雨がますます強くなるとピノは慌てて走り出した。そして彼が大きな道に差し掛かるとそこに一台の馬車が突っ込んで来たのだ。馬車は二つのランプを左右に揺らしながら忙しく走ってきて水飛沫を巻き上げた。その瞬間、ピノはとつさに路上へ転がったのだ。

「こらああっ！いきなり危ねえじゃろがああ！」御者がそう怒鳴る声がした。ピノはそれに驚きながら身を強張らせた。すると馬車はまた忙しく走り出してしまった。

「はあ…… 何しよつとや、オレって…」ピノはそう言いながらずぶ濡れの身体を起こした。すると彼の腕の中には一匹の太った猫の姿があったのだ。その猫は路上で蹲っていて馬車にひかれそうになっていた猫であり、それに気付いたピノがとつさに飛び出して助けたのだ。彼はとにかく猫を抱えたまま近くにあった馬屋へと飛び込んだ。

「うげげ… 泥が口に入ったわ…」ピノがそうやって咳込んでるとその腕の中から猫がするりと抜け出した。そして猫はぶるぶると身

体を震わせて水を撒き散らした。

「やれやれ、危ないところでした。これは御礼をせねばなんですな。」
「雨音が馬屋の屋根を叩く中でそうした声がした。ピノがそれに驚いてきよろきよろしているとそこには小さな小さな人影のようなものが立っていた。ピノはその正体を目にして腰を抜かしたのだ。」

「いやいや、驚かせてしまつて申し訳ございませんな。ご覧のとおり私はケットシーでございます。大学で教育学を教えておりますメダマルゲと申します。」そこに立っていたのはさっきの太った猫であり、いつの間にか二本足で立ち上がっていて背広を着て山高帽までかぶっていたのだ。その風体はまさに中年の男そのものであり、ピノはすっかり絶句したまま目を白黒させていた。

「ケ、ケットシーって、猫人間の……ですか？」ピノは恐る恐る彼のことを指差してそう言った。するとメダマルゲは苦笑いして鼻息を噴いた。

「まあまあ、そちらの、ヒュマの言葉でいうと猫人間と表現しますかな。しかしそれはどうにも差別的な表現ですぞ。」メダマルゲはそう言つてピノの指先を払うような仕草をした。そして懐のポケットから手帳を取り出してそこに書かれたものを見ながらうんうんと頷いたのだ。

「ふむふむ…… どうやらあなたはカツチンシャーと顔馴染みのようですね。でしたらあれこれと話が早い。」メダマルゲはそう言つて手帳の一枚に何かを書いて差し出した。ピノは暗い中でそれに目をやったが、手帳自体が小さかつたうえに彼らの文字で書かれた文章だったのでさっぱり読めなかった。

「東通商店街に三日月亭というレストランがあるのをご存じでしょう。その近所に住む赤毛の猫、それがカツチンシャーでございますよ。」メダマルゲはそう言つて笑つた。

「ああ、昼間のあの赤毛の猫か……」ピノはそう言つて首を傾げた。するとそこに立っていたメダマルゲはいつの間にか太った猫の姿に戻っていた。そして雨間を見計らつたようにして馬屋の外に走り去

つてしまったのだ。ピノは慌ててそれを追いかけようとしたが何かの匂いに気付いて座り込んだ。気がつくや彼にすぐ後ろには馬がいてこちらに尻を向けていたのだ。ベンクはそこにあった馬糞の匂いに顔をゆがめて慌てて飛び出したのだ。

翌日、ピノはまだ夜が明けるまえの早朝から動き出した。家を出て東通商店街へと向かうとまだどの店も閉まったままであり、牛乳の入った大きな缶をいくつも積んだ牛車だけがゆっくりと動いていた。ピノはそれを見ながらレストランの裏手へと回った。そこで息を切らして待つてると間もなく鈴が鳴るような音がした。彼が驚いて振向くとそこにはあの赤毛の猫がちょこんと座っていたのだ。

「な、なんだ、おまえ野良じゃなくて飼猫だったのか……」ピノは猫の首輪についた鈴を見ながらそう言った。そして彼がその猫のまえで膝を曲げるとそれはゆっくりと二本足で立ち上がった。

「いやはや、メダマルゲ教授から話はずかしくてますよ。ピノ・ブンクさん……」赤毛の猫は背筋をしゃんと立てていた。彼はやはり背広姿であり、頭には鳥打帽を被っていた。その立ち姿はまるで紳士のものであり、人間であるピノが見てもとても立派であった。

「私はこちらの街で外交官をしておりますカツチンシャーと申します。あなたがこちらの路地裏を覗いてるのをよく見かけてますよ。」赤毛の猫はそう言いながら胸のポケットから煙草を取り出した。そしてその煙をくゆらしながらメダマルゲに頼まれたという恩返しについて説明した。ピノはそこにじつと腰を下したまま小さいその話に聞き入った。彼はその赤毛の猫がロマリアの可愛がってる猫だとやっと気付いていた。

カツチンシャーが恩返しの商品として差し出したのは猫目石の腕輪なるものであった。腕輪といっても人間であるピノにとっては親指にはまる指輪ほどの大きさであった。カツチンシャーはそれについて自由自在に猫の姿に化けられる不思議な一品だと説明した。

「でも、猫になっても別に嬉しくも楽しくもないし……」ピノは渋い

顔をしてそう言った。するとカッチンシャーはヒゲをしゃんと伸ばしてニヤリとした。

「あなた、あのロマリアという料理人が無類の猫好きだをご存じでしょ。彼女に近づきたいのであれば猫に化けるのが最良、そういうことだと思いますよ。」カッチンシャーがそういうとピノは口をぱくぱくさせた。そして自分のことを見上げるようにして不敵に笑ってるケットシーの姿を見て背筋をぞくぞくとさせた。昨夜の太った猫といい、彼らはどうにも自分たち人間のことをすべて見透かしているようで怖かったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0894z/>

GOLDEN CARAVAN

2012年1月10日09時47分発行